

Oracle® Application Server

Adapter インストレーション・ガイド

10g (10.1.3.4.0)

部品番号 : B53526-01

2009 年 2 月

Oracle Application Server Adapter インストール・ガイド, 10g (10.1.3.4.0)

部品番号 : B53526-01

Oracle Application Server Adapter Installation Guide, 10g Release 3 (10.1.3.4.0)

原本部品番号 : E14201-01

原著者 : Sheela Vasudevan

原協力者 : Vikas Anand, Marian Jones, Sunil Gopal, Bo Stern

Copyright © 2008, 2009, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

制限付権利の説明

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントが、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供される場合は、次の Notice が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、このソフトウェアを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

このソフトウェアおよびドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても、一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	iii
対象読者	iv
ドキュメントのアクセシビリティについて	iv
関連ドキュメント	iv
表記規則	v
サポートおよびサービス	v
1 概要	
Oracle Application Server Adapter の概要	1-2
パッケージングされたアプリケーション・アダプタ	1-2
レガシー・アダプタ	1-3
アダプタによる Oracle Application Server コンポーネントの統合	1-4
インストール・タイプ	1-5
Oracle Application Server Adapter システム要件	1-7
ハードウェア要件	1-7
ソフトウェア要件	1-7
2 インストールと構成	
インストール作業	2-2
Oracle Application Server 10.1.3.1 のインストール	2-2
Oracle Application Server 10g リリース 3 (10.1.3) Patch Set 4 (10.1.3.4.0) の適用	2-7
パッケージングされたアプリケーション・アダプタのインストール後の作業	2-12
パッチのインストール	2-12
ライブラリ・ファイルのコピー	2-13
BSE デプロイメントの検査	2-16
J2CA デプロイメントの構成	2-17
J2CA インストールの検査	2-18
ディレクトリ構造	2-18
アプリケーション・エクスプローラの起動	2-19
J2CA のデータベース・リポジトリの構成	2-19
server.xml の変更	2-20
oc4j-ra.xml の変更	2-20
mySAP ERP アダプタ用の HP Itanium 64 マシンの構成	2-21

レガシー・アダプタのインストール後の作業	2-22
OPatch 7408494 のインストール	2-22
OPatch 7408494 のインストール前の作業	2-22
OPatch 7408494 のインストール作業	2-23
OPatch 7408494 のインストール後の作業	2-23
OPatch 7408494 の削除作業	2-23
ランタイム接続の構成	2-24
デザインタイム接続の構成	2-26
削除作業	2-28
グローバル化・サポート	2-29

A OracleAS Adapter for PeopleSoft の構成

PeopleSoft のバージョンの指定	A-2
アダプタ・コンポーネント・インタフェースのインストール	A-2
コンポーネント・インタフェースのインポートおよびビルド	A-2
コンポーネント・インタフェースのセキュリティの構成	A-5
OracleAS Adapter for PeopleSoft 用の TCP/IP メッセージ・ルーターのインストール	A-10
PeopleSoft のファイルの Lib ディレクトリへのコピー	A-11

索引

はじめに

この章では、次の項目について説明します。

- 対象読者
- ドキュメントのアクセシビリティについて
- 関連ドキュメント
- 表記規則
- サポートおよびサービス

対象読者

『Oracle Application Server Adapter インストレーション・ガイド』は、次の作業を行うシステム管理者を対象としています。

- Oracle Application Server アダプタのインストールおよび構成
- Oracle BPEL Process Manager でのアダプタの使用
- Oracle Enterprise Service Bus でのアダプタの使用

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

Oracle サポート・サービスへの TTY アクセス

AT&T の Customer Assistant を呼び出すには、711 または 1.800.855.2880 にお電話ください。AT&T の Customer Assistant が、お客様と Oracle サポート・サービス (1.800.223.1711) の間で情報を中継します。AT&T のリレー・サービスを利用するための詳細なインストラクションは、<http://www.consumer.att.com/relay/tty/standard2.html> で参照できます。AT&T の Customer Assistant から Oracle サポート・サービスへの連絡の後、Oracle サポート・サービスの技術者が、Oracle サービス・リクエストのプロセスに従って、技術的な問題を処理し、お客様へのサポートを提供します。

関連ドキュメント

詳細は、次のドキュメントを参照してください。

- 『Oracle BPEL Process Manager User's Guide』
- 『Oracle BPEL Process Manager インストレーション・ガイド』

表記規則

このマニュアルでは次の表記規則を使用します

規則	意味
太字	太字は、操作に関連する Graphical User Interface 要素、または本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。
イタリック体	イタリックは、ユーザーが特定の値を指定するプレースホルダ変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、段落内のコマンド、 URL 、サンプル内のコード、画面に表示されるテキスト、または入力するテキストを示します。

サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

Oracle サポート・サービス

オラクル製品サポートの購入方法、および Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.com/lang/jp/support/index.html>

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/documentation/index.html>

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

http://education.oracle.com/pls/web_prod-plq-dad/db_pages.getpage?page_id=3

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.com/lang/jp/index.html>

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/index.html>

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

1

概要

この章では、Oracle Application Server アダプタの概要を説明します。この章の項目は次のとおりです。

- Oracle Application Server Adapter の概要
- Oracle Application Server Adapter システム要件

Oracle Application Server Adapter の概要

OracleAS Adapters CD では、次のタイプのアダプタをインストールできます。

- パッケージングされたアプリケーション・アダプタ
- レガシー・アダプタ
- アダプタによる Oracle Application Server コンポーネントの統合
- インストール・タイプ

パッケージングされたアプリケーション・アダプタ

パッケージングされたアプリケーション・アダプタは、Oracle Application Server を、SAP および Siebel などの様々なパッケージングされたアプリケーションと統合します。これらのアダプタには、OracleAS Adapter for PeopleSoft、OracleAS Adapter for SAP R3、OracleAS Adapter for mySAP ERP、OracleAS Adapter for Siebel および OracleAS Adapter for J.D. Edwards があります。

注意： 現在のリリースでは、アダプタを新しくインストールする場合は、下位互換性のため、OracleAS Adapter for SAP R3 よりも OracleAS Adapter for mySAP ERP アダプタの使用をお勧めします。

表 1-1 では、パッケージングされたアプリケーション・アダプタについて説明します。

表 1-1 パッケージングされたアプリケーション用の Oracle Application Server アダプタ

アダプタ	説明
OracleAS Adapter for J.D. Edwards	J.D. Edwards アプリケーションへの包括的かつ双方向の標準ベース接続を提供します。
OracleAS Adapter for PeopleSoft	J2CA および Web サービス標準のサポートなどの独特の機能を備えており、PeopleSoft アプリケーションに対して完全な接続ソリューションを提供するオープンかつ再利用可能なサービス指向アーキテクチャを作成できます。
OracleAS Adapter for SAP R3	SAP システムと、その他のアプリケーション、データベースまたは外部ビジネス・パートナー・システム間でリアルタイム・ビジネス・データを交換します。
OracleAS Adapter for Siebel	実装作業を最小限にする独特の機能を提供することで、Oracle Application Server を Siebel システムに接続します。
OracleAS Adapter for mySAP ERP	OracleAS Adapter for mySAP ERP (OracleAS Adapter for mySAP) を介して Oracle Application Server を SAP システムに接続し、SAP システムへの接続を提供して相互作用を実行します。 OracleAS Adapter for mySAP ERP は、SAP アダプタと同じインストールの一部です。さらに、mySAP ERP アダプタは、SAP アダプタによってサポートされているすべてのバージョンと下位互換性があります。 注意： インストール前に、mySAP ERP および SAP R/3 の両方の動作要件マトリックスおよび Statement of direction (SOD) を確認してください。

レガシー・アダプタ

レガシー・アダプタは、Oracle Application Server をレガシー・アプリケーションおよびメインフレーム・アプリケーションと統合します。これらのアダプタには、OracleAS Adapter for Tuxedo、OracleAS Adapter for CICS、OracleAS Adapter for VSAM、OracleAS Adapter for IMS/TM および OracleAS Adapter for IMS/DB があります。

表 1-2 では、レガシー・アダプタについて説明します。これらのアダプタは、インストール時に OC4J コンテナ内に J2CA リソース・アダプタとしてデプロイされます。

表 1-2 レガシー・アプリケーション用 Oracle Application Server アダプタ

アダプタ	説明
OracleAS Adapter for Tuxedo	BEA Tuxedo アプリケーション・サーバー上で動作するサービスをモデル化します。Tuxedo メタデータをインポートし、このメタデータを Oracle Connect のマッピング定義に変換することで、Tuxedo システムのメタデータ・スキーマを取得および保守します。
OracleAS Adapter for CICS	Oracle Application Server を CICS に接続します。このアダプタは 2 フェーズ・コミットをサポートしており、分散トランザクションに全面的に使用できます。
OracleAS Adapter for VSAM	CICS により管理、または直接管理される VSAM データにアクセスできます。このアダプタは、入力レコードを形成するパラメータおよび出力レコードを形成する XML ドキュメントに集約された出力（出力がある場合）を含むパラメータ化された SQL として、相互作用を実装します。
OracleAS Adapter for IMS/TM	MPP ベースの IMS/TM トランザクションへのアクセスを可能にします。各 OracleAS Adapter for IMS/TM のアウトバウンドの相互動作は、特定の IMS/TM トランザクションにマップされます。
OracleAS Adapter for IMS/DB	PSB ファイル、DBD ファイルおよび COBOL コピーブックなどの各種 IMS 定義ファイルをインポートして、IMS/DB のメタデータ・スキーマを取得および保守します。
OracleAS CDC Adapter for Adabas	Adabas データソース内のデータに加えられた（挿入、更新および削除などの）変更を取得および提供します。
OracleAS CDC Adapter for DB2	DB2 データソース内のデータに加えられた（挿入、更新および削除などの）変更を取得および提供します。
OracleAS CDC Adapter for IMS/DB	IMS/DB データソース内のデータに加えられた（挿入、更新および削除などの）変更を取得および提供します。
OracleAS CDC Adapter for SQL Server	SQL Server 2000 および 2005 内の表に加えられた（挿入、更新および削除などの）変更を取得および提供します。
OracleAS CDC Adapter for VSAM	VSAM データソース内のデータに加えられた（挿入、更新および削除などの）変更を取得および提供します。

アダプタによる Oracle Application Server コンポーネントの統合

Oracle Application Server アダプタを使用すると、パッケージングされたアプリケーション、レガシー・アプリケーションおよびメインフレーム・アプリケーションを、Oracle BPEL Process Manager および Oracle Enterprise Service Bus などの各種 Oracle Application Server コンポーネントと統合できます。テクノロジー・アプリケーション用の Oracle Application Server アダプタおよび Oracle AS Adapter for Oracle Applications は、BPEL Process Manager のインストールにパッケージングされています。

表 1-3 では、アダプタにより統合できる Oracle Application Server コンポーネントについて説明します。アダプタは、SOA Suite、Oracle Enterprise Service Bus および Oracle BPEL Process Manager と動作することが確認されています。

表 1-3 アダプタによる Oracle Application Server コンポーネントの統合

コンポーネント	説明
Oracle Application Server Portal	ポータル Web インタフェースの作成、情報のパブリッシュと管理、動的データへのアクセスおよびポータルのカスタマイズを行うための宣言型環境と、J2EE ベースのアプリケーションにアクセスするための拡張可能なフレームワークを結合します。OracleAS Portal を使用すると、従業員、パートナーおよびサプライヤに必要な情報を提供したり、各コミュニティに適合したビューを柔軟に作成できます。
Oracle Containers for J2EE (OC4J)	すべて Java で記述された、Oracle Application Server の J2EE サーバー・コンポーネント。標準 Java Development Kit (JDK) の Java 仮想マシン (JVM) 上で実行されます。OC4J には、JSP トランスレータ、Java サーブレット・コンテナおよび Enterprise JavaBeans コンテナが組み込まれています。
Oracle BPEL Process Manager	組織は、Business Process Execution Language for Web Services (BPEL) 標準に基づいてビジネス・プロセスをモデル化およびデプロイできます。Oracle BPEL Process Manager を使用すると、組織は統合プロジェクトのコストおよび複雑さを軽減し、戦略的価値を高めることができます。
Oracle Enterprise Service Bus	エンタープライズ・サービス・バスは、データを複数のエンドポイント間（エンタープライズの内外とも）で移動させます。異なる種類のアプリケーション間では、ビジネス・ドキュメントを（eXtensible Markup Language (XML) メッセージとして）接続、変換およびルーティングするために、オープン・スタンダードを使用します。これにより、既存のアプリケーションに与える影響を最小限に抑えながら、ビジネス・データを監視および管理することが可能になります。エンタープライズ・サービス・バスは、サービス指向アーキテクチャ (SOA) およびイベント・ドリブン・アーキテクチャ (EDA) を実現するための基盤となるインフラストラクチャです。

インストール・タイプ

Oracle Application Server アダプタには、次の 2 つのタイプのインストールを使用できます。

- デザインタイムおよびランタイム
- デザインタイム

インストール時にインストール・タイプを選択してから、インストールするアダプタのタイプを選択します。表 1-4 では、インストール・タイプについて説明します。

表 1-4 インストール・タイプ

インストール・タイプ	説明
デザインタイムおよびランタイム	<p>次のデザインタイム・コンポーネントとランタイム・コンポーネントをインストールします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ デザインタイム・コンポーネント アプリケーション・エクスプローラがインストールされます。 <p>注意: レガシー・アプリケーションの場合、デザインタイム・コンポーネントはインストールされません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ランタイム・コンポーネント 次のランタイム・コンポーネントが自動的にデプロイされます。 <ul style="list-style-type: none"> - パッケージングされたアプリケーション用 J2CA デプロイメント - パッケージングされたアプリケーション用 BSE デプロイメント - レガシー・プラットフォーム上で動作する Oracle Connect エンジンと接続するための J2CA レガシー・アダプタ <p>注意: Oracle Studio を Windows に、また Oracle Connect を必要なレガシー・プラットフォームにインストールする必要があります。これらは Oracle Universal Installer のコンポーネントではなく、Adapters CD に含まれています。</p>
デザインタイム	<p>アプリケーション・エクスプローラのデザインタイム・コンポーネントのみがインストールされます。ランタイム・コンポーネントはデプロイされません。</p> <p>注意: このインストール・タイプには、J2EE および Web Cache またはその他の中間層インストール・タイプは不要です。</p>

パッケージングされたアプリケーション・アダプタは、次のコンポーネントとしてデプロイできます。

- J2CA デプロイメント用の J2CA 1.0 リソース・アダプタおよびテスト・サブレット
- OC4J コンテナ内の Web サービス・サブレット (あるいは、OracleAS Adapter ビジネス・サービス・エンジン (BSE))

パッケージングされたアプリケーション用の OracleAS アダプタを構成するための OracleAS Adapter アプリケーション・エクスプローラ・ツールも提供されます (J2CA および BSE デプロイメントの両方)。

レガシー・アダプタは、J2CA 1.0 リソース・アダプタとしてデプロイできます。レガシー・アダプタ用の Oracle Connect をインストールするには、表 1-5 に示す各項を参照してください。これらの各項では、Oracle Connect および Oracle Studio を CD-ROM からインストールする方法と、Oracle Studio を使用して Oracle Connect を構成する方法を説明しています。

表 1-5 Oracle Connect のインストール

レガシー・アダプタ	参照項目
OracleAS Adapter for Tuxedo	『Oracle Application Server Adapter for Tuxedo ユーザーズ・ガイド』の「OracleAS Adapter for Tuxedo のインストールおよび構成」
OracleAS Adapter for CICS	『Oracle Application Server Adapter for CICS ユーザーズ・ガイド』の「OracleAS Adapter for CICS のインストールおよび構成」
OracleAS Adapter for VSAM	『Oracle Application Server Adapter for VSAM ユーザーズ・ガイド』の「OracleAS Adapter for VSAM のインストールおよび構成」
OracleAS Adapter for IMS/TM	『Oracle Application Server Adapter for IMS/TM ユーザーズ・ガイド』の「OracleAS Adapter for IMS/TM のインストールおよび構成」
OracleAS Adapter for IMS/DB	『Oracle Application Server Adapter for IMS/DB ユーザーズ・ガイド』の「OracleAS Adapter for IMS/DB のインストールおよび構成」
OracleAS CDC Adapter for Adabas	Adabas データソース内のデータに加えられた（挿入、更新および削除などの）変更を取得および提供します。
OracleAS CDC Adapter for DB2	DB2 データソース内のデータに加えられた（挿入、更新および削除などの）変更を取得および提供します。
OracleAS CDC Adapter for IMS/DB	IMS/DB データソース内のデータに加えられた（挿入、更新および削除などの）変更を取得および提供します。
OracleAS CDC Adapter for SQL Server	SQL Server 2000 および 2005 内の表に加えられた（挿入、更新および削除などの）変更を取得および提供します。
OracleAS CDC Adapter for VSAM	VSAM データソース内のデータに加えられた（挿入、更新および削除などの）変更を取得および提供します。

関連項目： 詳細は、Oracle Application Server 10g ドキュメント・ライブラリの次のマニュアルを参照してください。

- 『Oracle BPEL Process Manager User's Guide』
- 『Oracle BPEL Process Manager インストレーション・ガイド』
- 『Oracle Enterprise Service Bus インストレーション・ガイド』
- 『Oracle SOA Suite 開発者ガイド』
- 『Oracle Application Server Portal ユーザーズ・ガイド』
- 『Oracle Application Server Adapter for PeopleSoft ユーザーズ・ガイド』
- 『Oracle Application Server Adapter for SAP ユーザーズ・ガイド』
- 『Oracle Application Server Adapter for Siebel ユーザーズ・ガイド』
- 『Oracle Application Server Adapter for J.D. Edwards OneWorld ユーザーズ・ガイド』
- 『Oracle Application Server Adapter for Tuxedo ユーザーズ・ガイド』
- 『Oracle Application Server Adapter for CICS ユーザーズ・ガイド』
- 『Oracle Application Server Adapter for VSAM ユーザーズ・ガイド』
- 『Oracle Application Server Adapter for IMS/TM ユーザーズ・ガイド』
- 『Oracle Application Server Adapter for IMS/DB ユーザーズ・ガイド』

Oracle Application Server Adapter システム要件

次の項では、Oracle Application Server アダプタをインストールするためのシステム要件について説明します。

- [ハードウェア要件](#)
- [ソフトウェア要件](#)

ハードウェア要件

表 1-6 は、OracleAS Adapter をインストールするコンピュータのハードウェア要件を示します。

表 1-6 ハードウェア要件

ハードウェア	Windows 2000	Solaris	Linux
ディスク領域 (すべてのアダプタをインストールする場合)	200MB	200MB	200MB
メモリー	256MB	256MB	256MB

ソフトウェア要件

次の項では、Oracle Application Server アダプタのソフトウェア要件について説明します。

- [オペレーティング・システム要件](#)
- [J2EE および Web Cache の要件](#)

オペレーティング・システム要件

表 1-7 は、Oracle Application Server アダプタをインストールするコンピュータのオペレーティング・システム要件を示します。

表 1-7 オペレーティング・システム要件

オペレーティング・システム	バージョン
HP Tru64	HP Tru64 UNIX (Alpha) 5.1b
HP-UX	HP-UX (PA-RISC) 11.11、11.23、HP-UX (Itanium-2) 11.11、11.23
IBM AIX	AIX (POWER) バージョン 5.2
Linux (x86)	Red Hat Enterprise Linux 2.1、3.0 SuSE SLES8、SLES9 関連項目: 必要なオペレーティング・システムのパッチ、パッケージおよびカーネル・パラメータの設定は、Linux x86 用の『Oracle Application Server インストール・ガイド for Microsoft Windows』を参照してください。
Sun SPARC Solaris	Sun SPARC Solaris 8 および 9 関連項目: 必要なオペレーティング・システムのパッチ、パッケージ、スワップ領域の要件およびカーネル・パラメータの設定は、Solaris 用の『Oracle Application Server インストール・ガイド for Microsoft Windows』を参照してください。
Microsoft Windows	Windows XP Professional、Windows 2000 (SP3 以降) 関連項目: プロセッサ、TEMP ディレクトリ、仮想メモリーおよびスワップ領域の要件は、Windows 用の『Oracle Application Server インストール・ガイド for Microsoft Windows』を参照してください。

J2EE および Web Cache の要件

「完全」インストール・タイプを使用する場合は、まず、Oracle Application Server を「J2EE and Web Cache」インストール・タイプでインストールする必要があります。次に、同じ Oracle ホームに Oracle Application Server アダプタを「完全」インストール・タイプでインストールします。

「デザインタイム」インストール・タイプには、「J2EE and Web Cache」またはその他の中間層インストール・タイプは不要です。

注意： Oracle Application Server アダプタを Oracle BPEL Process Manager とともにインストールするには、BPEL Process Manager パッチ 1 を使用する必要があります。

インストールと構成

この章では、Oracle Application Server アダプタのインストール方法と構成方法を説明します。
この章の項目は次のとおりです。

- インストール作業
- パッケージングされたアプリケーション・アダプタのインストール後の作業
- レガシー・アダプタのインストール後の作業
- 削除作業

インストール作業

Oracle Application Server 10.1.3.4 をインストールするには、最初に Oracle Application Server 10.1.3.1 をインストールし、次に Oracle Application Server 10g リリース 3 (10.1.3) Patch Set 4 (10.1.3.4.0) を適用する必要があります。

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Application Server 10.1.3.1 のインストール](#)
- [Oracle Application Server 10g リリース 3 \(10.1.3\) Patch Set 4 \(10.1.3.4.0\) の適用](#)

Oracle Application Server 10.1.3.1 のインストール

Oracle Application Server は、次のアプリケーションとともにインストールできます。

- Oracle Application Server SOA Suite
- Oracle BPEL Process Manager
- Oracle Enterprise Service Bus
- J2EE および Web Cache

Oracle Application Server アダプタをインストールするには、次の手順を実行します。

1. SOA Suite の一部として Oracle BPEL Process Manager (BPEL) および Oracle Enterprise Service Bus (ESB) をインストール済の場合はこの手順をスキップし、手順 3 に進んでください。

ただし、「J2EE and Web Cache」インストール・タイプの Oracle Application Server をインストールしている場合は、`{J2EE_HOME}/config/server.xml` を変更する必要があります。

```
<shared-library name="oracle.bpel.common" version="10.1.3">
  <code-source path="/temp/dummy"/>
</shared-library>
```

`server.xml` を変更しなかった場合、インストール中に JCA-APP- アダプタがデプロイされていませんというエラーが発生する可能性があります。

2. Solaris または Linux にインストールする場合、オペレーティング・システム固有の次の手順は、『Oracle Application Server インストレーション・ガイド for Solaris Operating System』、『Oracle Application Server インストレーション・ガイド for HP-UX PA-RISC』および『Oracle Application Server インストレーション・ガイド for Linux x86』を参照してください。

- CD-ROM のマウント・ポイントの設定

Microsoft Windows にインストールする場合、次の手順は、『Oracle Application Server インストレーション・ガイド for Microsoft Windows』を参照してください。

- Oracle Universal Installer の起動
3. OracleAS Adapter の CD-ROM を挿入します。
 4. OracleAS Adapter の CD-ROM の `software` ディレクトリに移動します。

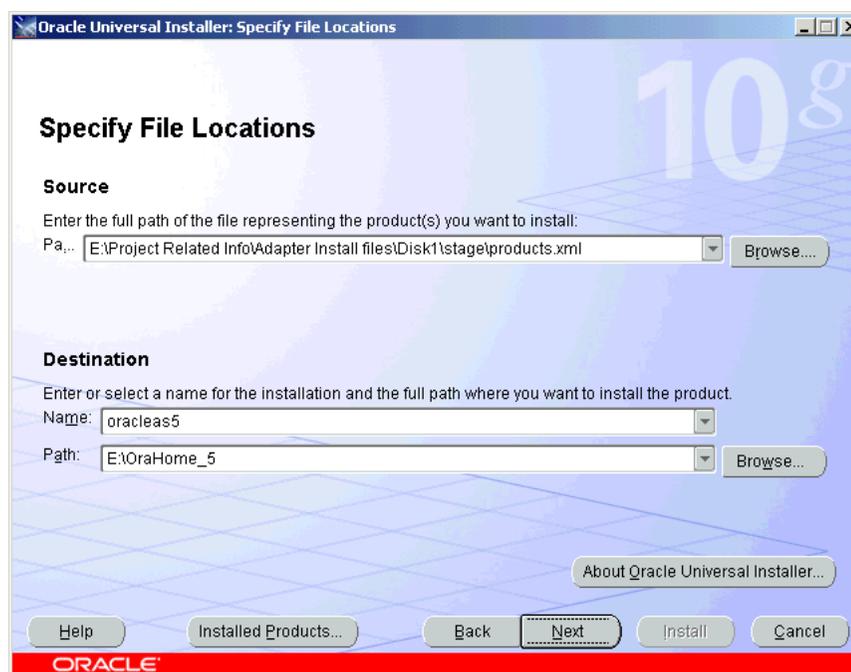
5. Oracle Universal Installer を起動します。次の表に、Oracle Universal Installer の起動手順を示しています。

プラットフォーム	手順
Solaris または Linux	オペレーティング・システムのプロンプトで、次のコマンドを入力します。 ./runInstaller
Windows	「setup.exe」をクリックします。

「ようこそ」画面が表示されます。

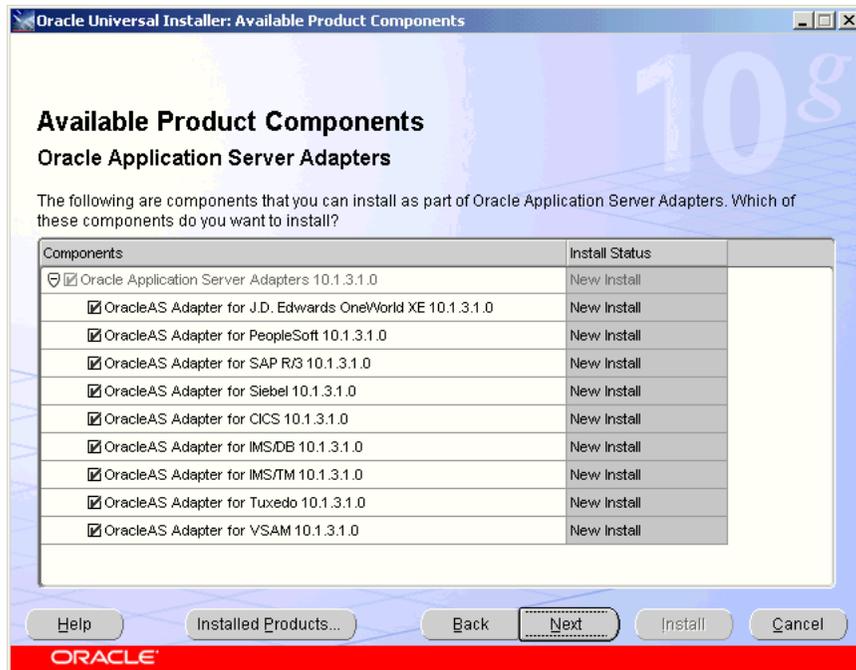
6. 「次へ」をクリックします。図 2-1 に示すように「ファイルの場所の指定」画面が表示されます。

図 2-1 ファイルの場所の指定



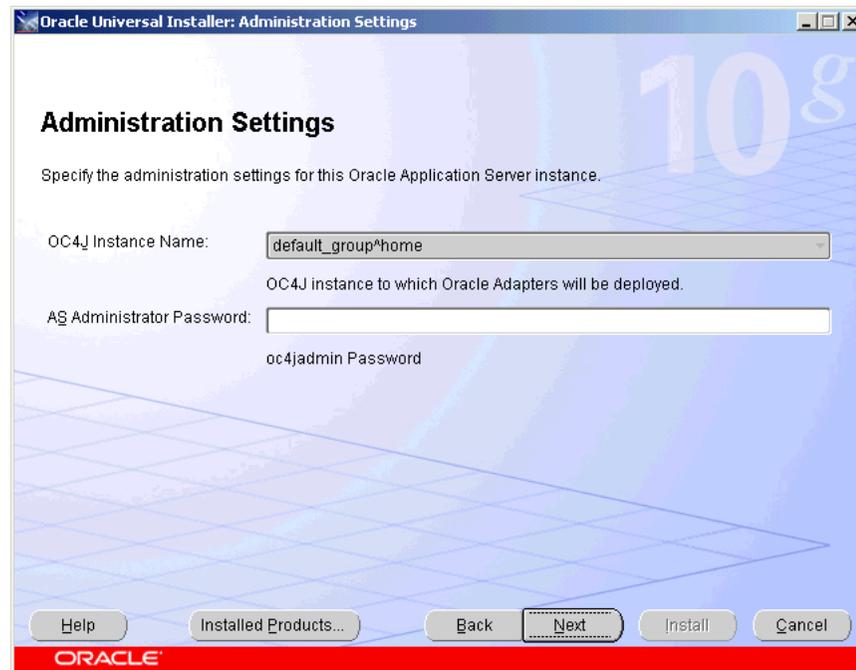
7. 「インストール先」フィールドに、OracleAS Adapter をインストールする Oracle ホームの名前を入力します。「ソース」フィールドのディレクトリ・パスは変更しないでください。このパスは、OracleAS Adapter のインストール・ファイルの場所を示しています。
8. 「次へ」をクリックします。「インストール・タイプの選択」画面が表示されます。
9. 次のいずれかのインストール・タイプを選択します。
- デザインタイムおよびランタイム
 - デザインタイム
10. 「次へ」をクリックします。図 2-2 に示すように「使用可能な製品コンポーネント」画面が表示されます。

図 2-2 使用可能な製品コンポーネント



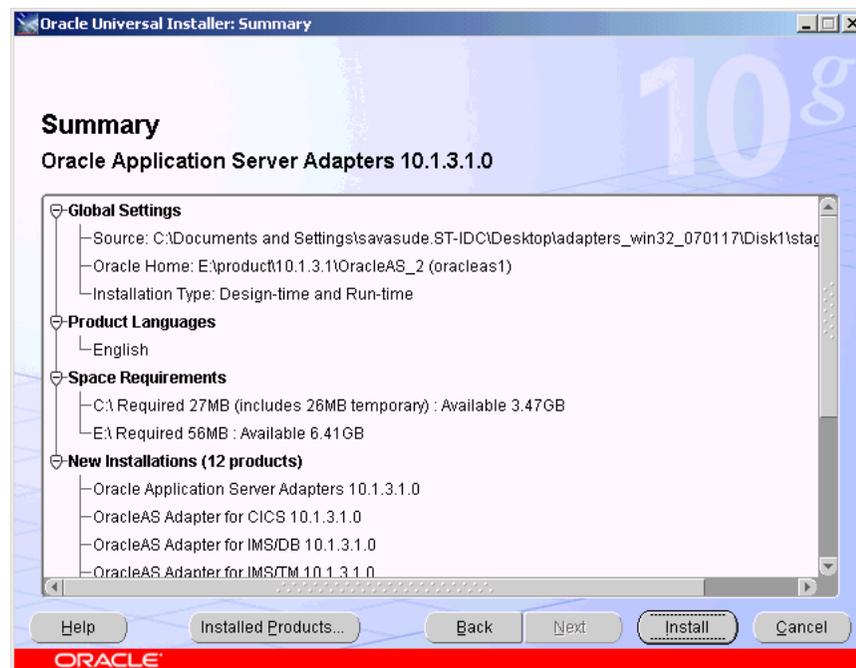
11. 次のリストからインストールするアダプタを選択します。
 - OracleAS Adapter for J.D. Edwards OneWorld XE 10.1.3.1.0
 - OracleAS Adapter for PeopleSoft 10.1.3.1.0
 - OracleAS Adapter for SAP R/3 10.1.3.1.0
 - OracleAS Adapter for Siebel 10.1.3.1.0
 - OracleAS Adapter for CICS 10.1.3.1.0
 - OracleAS Adapter for IMS/DB 10.1.3.1.0
 - OracleAS Adapter for IMS/TM 10.1.3.1.0
 - OracleAS Adapter for Tuxedo 10.1.3.1.0
 - OracleAS Adapter for VSAM 10.1.3.1.0
12. 「次へ」をクリックします。
13. 手順9で「デザインタイムおよびランタイム」を選択した場合は、図 2-3 に示すように、「管理 (Administration) 設定」ページが表示されます。手順 13a から 13b を実行します。実行しないと、「サマリー」画面が表示されます。手順 14 に進みます。

図 2-3 管理 (Administration) 設定



- a. AS 管理者のパスワードを入力します。
- b. 「次へ」をクリックします。図 2-4 に示すように「サマリー」画面が表示されます。

図 2-4 「サマリー」画面



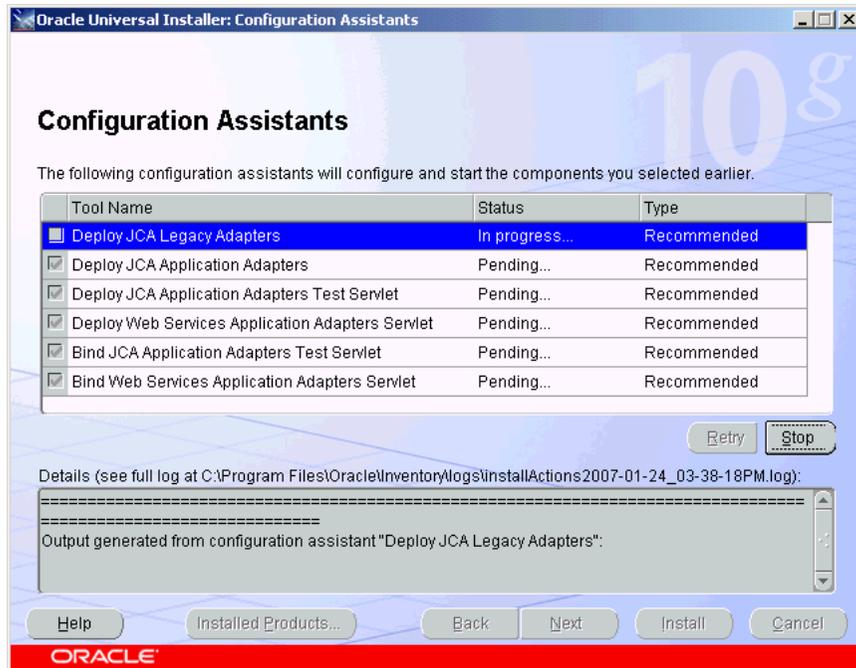
14. 十分なディスク領域があることを確認するためのディスク要件など、具体的な詳細情報を「サマリー」画面で確認します。

15. 「インストール」をクリックします。

インストールの完了後、OracleAS Adapter を自動的に構成するため、インストール後のコンフィギュレーション・アシスタントが図 2-5 のように起動されます。

- JCA レガシー・アダプタのデプロイ
- JCA アプリケーション・アダプタのデプロイ
- JCA アプリケーション・アダプタのデプロイのテスト
- Web サービス・アプリケーション・アダプタのデプロイ

図 2-5 「コンフィギュレーション・アシスタント」画面



16. インストールおよび構成が正常に終了すると、「インストールの終了」画面が表示されます。選択したアダプタが、パッケージングされたアプリケーション・アダプタの Oracle ホームの adapters/application ディレクトリにインストールされます。

インストールの詳細は、最新の installActionsYEAR_MM_DD_TIME.log ファイルを参照してください。このファイルは、UNIX では oraInventory_location/logs ディレクトリに、Windows では Program Files¥Oracle¥Inventory¥logs ディレクトリにあります。

Oracle Application Server 10g リリース 3 (10.1.3) Patch Set 4 (10.1.3.4.0) の適用

次の作業は、Oracle Application Server 10g リリース 3 (10.1.3) Patch Set 4 (10.1.3.4.0) の適用です。

この項では、Oracle Application Server 10g リリース 3 (10.1.3) Patch Set 4 (10.1.3.4.0) 用の手順を説明します。含まれる手順は、次のとおりです。

1. Oracle Application Server 10g リリース 3 (10.1.3) Patch Set 4 (10.1.3.4.0) メディアの Disk1 を挿入するか、解凍されたパッチ・セット・ソフトウェアを含むディレクトリの Disk1 サブディレクトリに移動します。
2. Oracle Universal Installer を起動します。
 - Linux x86 の場合
runInstaller コマンドを実行します。
 - Microsoft Windows (32-Bit) の場合
setup.exe をダブルクリックします。

図 2-6 に示すように「Oracle Universal Installer: ようこそ」ページが表示されます。

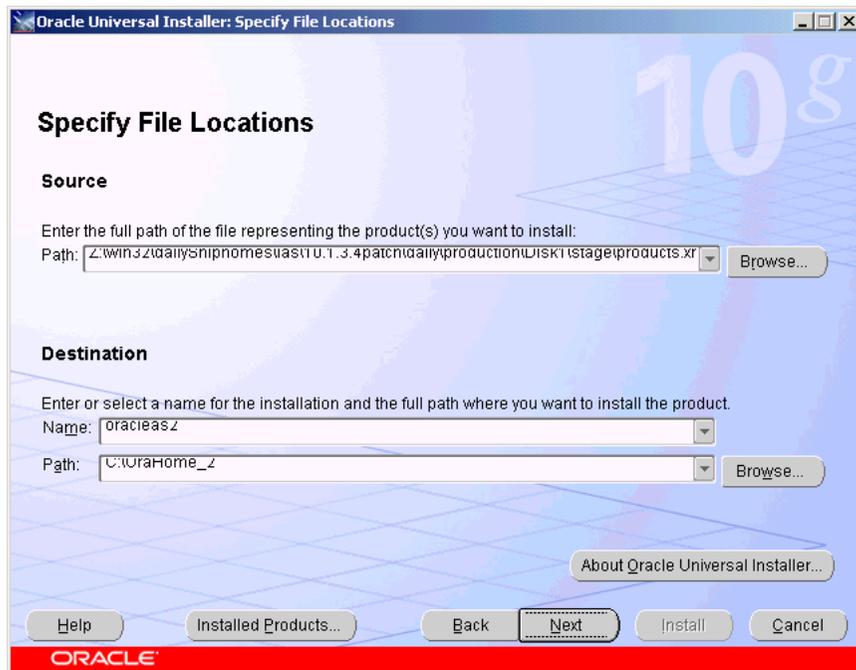
図 2-6 「Oracle Universal Installer: ようこそ」ページ



3. Oracle Universal Installer の「ようこそ」画面を確認して「次へ」をクリックします。

図 2-7 に示すように「Oracle Universal Installer: ファイルの場所の指定」画面が表示されます。

図 2-7 「Oracle Universal Installer: ファイルの場所の指定」ページ



4. 「ファイルの場所の指定」ページで、次の詳細を入力します。
 - **ソース**: 製品のインストール元である `products.xml` ファイルへのフルパスです。`runInstaller` コマンドまたは `setup.exe` ファイルを使用してインストーラを起動すると、インストーラは `products.xml` ファイルのデフォルト値を検出し、それを使用します。このパスは変更しないでください。
 - **名前**: パッチを適用する Oracle ホームの名前を、ドロップダウン・メニューから選択します。
 - **パス**: 「名前」ドロップダウン・メニューから既存の Oracle ホームを選択すると、このフィールドに値が自動的に入力されます。
 - **参照**: このボタンは、ファイル・システム内を移動してソースの場所またはインストール先を選択するために使用します。
5. ファイルの場所を指定した後、「次へ」をクリックします。
図 2-8 に示すように「管理者 (oc4jadmin) パスワード」ページが表示されます。

図 2-8 「管理者 (oc4jadmin) パスワード」 ページ



6. パッチ適用対象の Oracle Application Server インスタンスへの oc4jadmin ユーザー・パスワードを入力して、「次へ」をクリックします。

図 2-9 に示すように、中間層が停止されることを知らせる警告が表示されます。

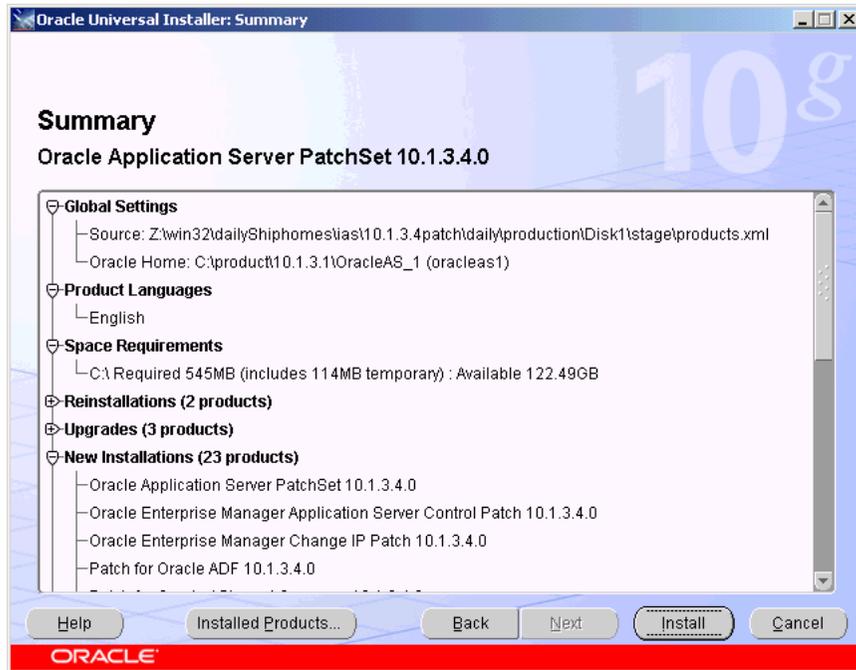
図 2-9 「警告」 ページ



7. 「OK」をクリックします。

図 2-10 に示すように「サマリー」ページが表示されます。

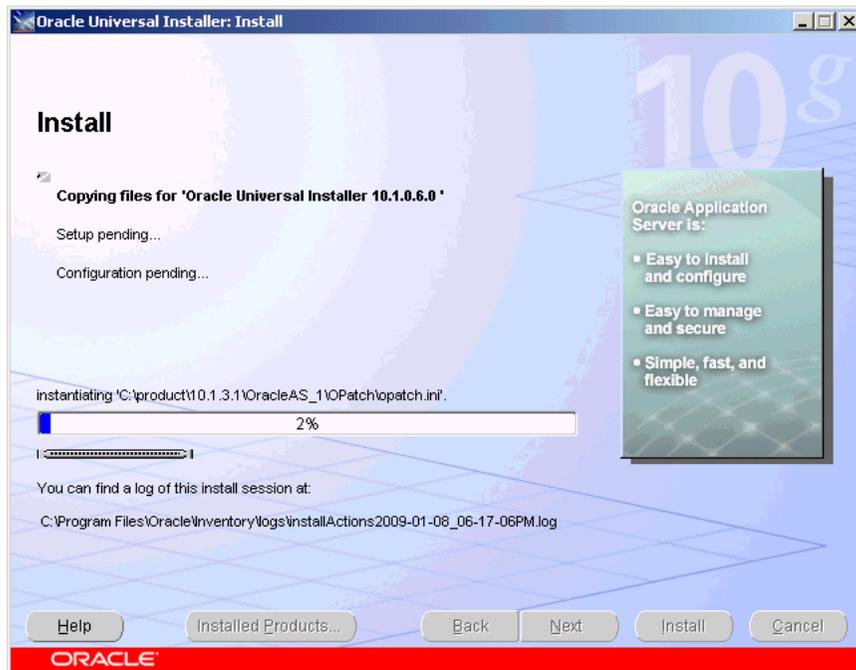
図 2-10 「Oracle Universal Installer: サマリー」 ページ



8. 選択内容を確認して、「インストール」をクリックします。

図 2-11 に示すように、パッチ・セットのインストールの進行状況を示す「インストール」ページが表示されます。

図 2-11 「Oracle Universal Installer: インストール」 ページ



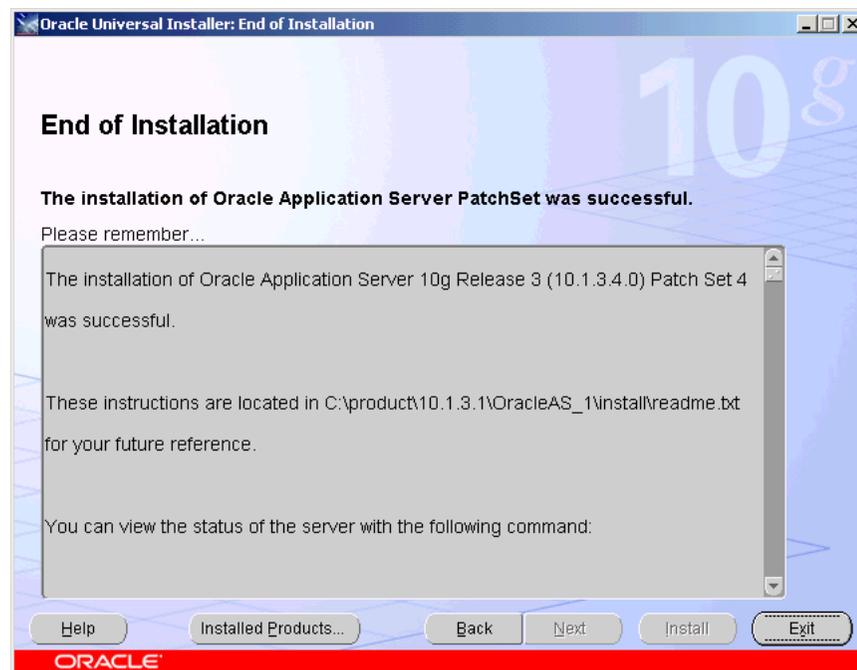
- パッチ・セットのインストール後、コンフィギュレーション・アシスタントによってコンポーネントが自動的に構成されます。図 2-12 に示すように「コンフィギュレーション・アシスタント」ページが表示されます。

図 2-12 「Oracle Universal Installer: コンフィギュレーション・アシスタント」ページ



- コンフィギュレーション・アシスタントのインストール後、図 2-13 に示すように「インストールの終了」ページが表示されます。

図 2-13 「Oracle Universal Installer: インストールの終了」ページ



パッケージングされたアプリケーション・アダプタのインストール後の作業

パッケージングされたアプリケーション・アダプタのインストール後の構成作業を次のように行います。

- [パッチのインストール](#)
- [ライブラリ・ファイルのコピー](#)
- [BSE デプロイメントの検査](#)
- [J2CA デプロイメントの構成](#)
- [J2CA インストールの検査](#)
- [ディレクトリ構造](#)
- [アプリケーション・エクスプローラの起動](#)
- [J2CA のデータベース・リポジトリの構成](#)
- [server.xml の変更](#)
- [oc4j-ra.xml の変更](#)
- [mySAP ERP アダプタ用の HP Itanium 64 マシンの構成](#)

注意： このマニュアルに示すディレクトリ・パスは、UNIX の表記規則に準拠しています。たとえば、スラッシュ (/) を使用しています。

OracleAS Adapter を Windows で使用している場合は、必要に応じてディレクトリ・パスを変更してください。

パッチのインストール

インストール後の最初の手順では、Metalink から次の必須パッチを入手し、インストールします。

- **パッチ 5717193:** Tuxedo アダプタの場合。
- **パッチ 5895585:** アプリケーション・アダプタ (mySAP、Siebel、Peoplesoft および J.D. Edwards OneWorld XE) の場合。
- **パッチ 5895598:** レガシー・アダプタ (Tuxedo、CICS、VSAM、IMS/TM および IMS/DB) の場合。

ライブラリ・ファイルのコピー

パッケージングされたアプリケーション・アダプタでは、ライブラリ・ファイルをディレクトリにコピーする必要があります。

1. これらのアダプタのライブラリ・ファイルを、
`ORACLE_HOME/adapter/application/lib` ディレクトリにコピーします。

アダプタ	ライブラリ・ファイル
OracleAS Adapter for J.D. Edwards OneWorld XE	<p>J.D. Edwards OneWorld Java ベースの ThinNet API</p> <p>この API は、J.D. Edwards OneWorld のインストール・メディアに収録された .jar ファイルとして配布されます。これらのライブラリは、J.D. Edwards OneWorld のリリースによって異なる可能性があります。次のファイルが含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Kernel.jar ■ Connector.jar <p>J.D. Edwards OneWorld XE システムに必要なこれ以外の手順は、『Oracle Application Server Adapter for J.D. Edwards OneWorld ユーザーズ・ガイド』を参照してください。</p>
OracleAS Adapter for PeopleSoft	<ul style="list-style-type: none"> ■ PeopleSoft Java Object Adapter ファイル (psjao.jar) <p>このファイルでは、クライアント・アプリケーションと PeopleSoft 間にまたがるローレベル・インタフェースを提供します。このファイルは、<code>PeopleSoft_home_directory/web/PSJOA</code> ディレクトリにおいて、PeopleSoft とともに提供されます。</p> <p>psjao.jar ファイルは、PeopleSoft のバージョンごとに異なります。PeopleTools のリリースをアップグレードするときは、必ず新しいリリースの psjao.jar ファイルを lib ディレクトリにコピーし、すべてのコンポーネントを再起動してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ pstools.properties <p>このファイルは、PeopleSoft 8.1x に必要です。このファイルは、<code>PeopleSoft_home_directory/web/jmac</code> ディレクトリにあります。</p> <p>PeopleSoft に必要なこれ以外の手順は、『Oracle Application Server Adapter for PeopleSoft ユーザーズ・ガイド』を参照してください。</p>

アダプタ	ライブラリ・ファイル
OracleAS Adapter for SAP (R/3 および mySAP ERP)	<p>SAP Java コネクタ (通常は、sapjco.jar)</p> <p>SAP のコネクタ・セットの最新情報は、http://service.sap.com/connectors を参照してください。</p> <p>このファイルにアクセスするには、有効な SAP サービス ID が必要です。SAP Java コネクタ (SAP JCo) の概要ページの指示に従って、最新バージョンをダウンロードします。詳細は、SAP BASIS の管理者に問い合わせてください。</p> <p>アーカイブ・ツールを使用して SAP JCo が格納されているアーカイブを開き、ランタイム・ファイルを抽出します。ファイル名はオペレーティング・システムによって異なる場合がありますが、通常はアーカイブのルートに格納されています。</p> <p>注意：すべてのオペレーティング・システム：sapjco.jar ファイルを <code>ORACLE_HOME¥adapters¥application¥lib</code> ディレクトリ内に置く必要があります。その後、sapjco.jar を Oracle Application Server のクラスパスに追加する必要があります。</p> <p>Windows の場合、librfc32.dll を <code>%WINDIR%¥system32</code> ディレクトリ内に、sapjcorfc.dll を sapjco.jar と同じディレクトリ内 (<code>ORACLE_HOME¥adapters¥application¥lib</code>) に置く必要があります。その他のプラットフォームでは、対応する場所を使用します。これらのライブラリ・ファイルは、オペレーティング・システムによって異なります。次に例を示します。</p> <p>Linux/Solaris/OS400:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ libsapjcorfc.so ■ librfccm.so <p>HP-UX:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ librfccm.sl ■ libsapjcorfc.sl <p>AIX:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ librfccm.so ■ libsapjcorfc.so <p>UNIX プラットフォームでは、共有ライブラリ・ファイルが配置されているディレクトリを、オペレーティング・システムに適用される共有ライブラリ変数に追加する必要があります。次に、プラットフォームと、関連付けられている変数のリストを示します。</p> <p>AIX:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ LIBPATH <p>HP-UX:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SHLIB_PATH <p>その他の UNIX プラットフォーム</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ LD_LIBRARY_PATH <p>Solaris: 次に、SAP ライブラリ・ファイルを指定するための、サポートされている手順を 2 つ示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SAP JCO ファイル (sapjco.jar、librfccm.so および libsapjcorfc.so) を <code>ORACLE_HOME/jdk/jre/lib/sparc/server</code> にコピーします。 ■ SAP JCO ファイルを <code>/usr/j2sdk1.4.2_09/jre/lib/sparcv9/server</code> にコピーします。 <p>または、Application Server Control コンソールを使用して、これらのファイルへのパスを環境変数定義に追加します。Application Server の管理オプションの詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。</p> <p>SAP R/3 および mySAP ERP に必要なこれ以外の手順は、『Oracle Application Server Adapter for SAP ユーザーズ・ガイド』を参照してください。</p>

アダプタ	ライブラリ・ファイル
OracleAS Adapter for Siebel	<p>Siebel 6.3.x 以降の場合、.jar ファイルとして Siebel Thin Client とともに提供される Siebel Java Data Bean API。</p> <p>これらのライブラリは、Siebel のリリースによって内容と名前が異なります。そのため、ターゲットの Siebel システムとともに提供される Siebel Thin Client を常にアダプタとともに使用する必要があります。次に例を示します。</p> <p>Siebel 6.3.x の場合。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SiebelTcOM.jar ■ SiebelTcCommon.jar ■ SiebelTC_enu.jar ■ SiebelDataBean.jar <p>Siebel 7.0.3 の場合。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SiebelJI_Common.jar ■ SiebelJI_enu.jar <p>Siebel 7.5.2 の場合。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SiebelJI_Common.jar ■ SiebelJI_enu.jar ■ SiebelJI.jar <p>Siebel 7.7 の場合。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SiebelJI_enu.jar ■ Siebel.jar <p>Siebel 7.8 の場合。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SiebelJI_enu.jar ■ Siebel.jar <p>Siebel COM ベース API (Windows のみ) を使用する場合は、Siebel Thin Client をインストールして、Siebel アダプタにアクセスできるようにしておく必要があります。</p> <p>注意: 以前に示した次のファイルは、英語のインストール用です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SiebelTC_enu.jar ■ SiebelJI_enu.jar <p>英語以外のインストールの場合は、最後の 3 文字 (_enu) が変わります。</p> <p>MQ シリーズをトランスポートとして使用する場合は、com.ibm.mq.jar ファイルも使用する必要があります。</p> <p>Siebel に必要なこれ以外の手順は、『Oracle Application Server Adapter for Siebel ユーザーズ・ガイド』を参照してください。</p>

BSE デプロイメントの検査

OracleAS Adapter ビジネス・サービス・エンジンのインストールの検査は、次のように行います。

1. Web ブラウザで次のページを開きます。

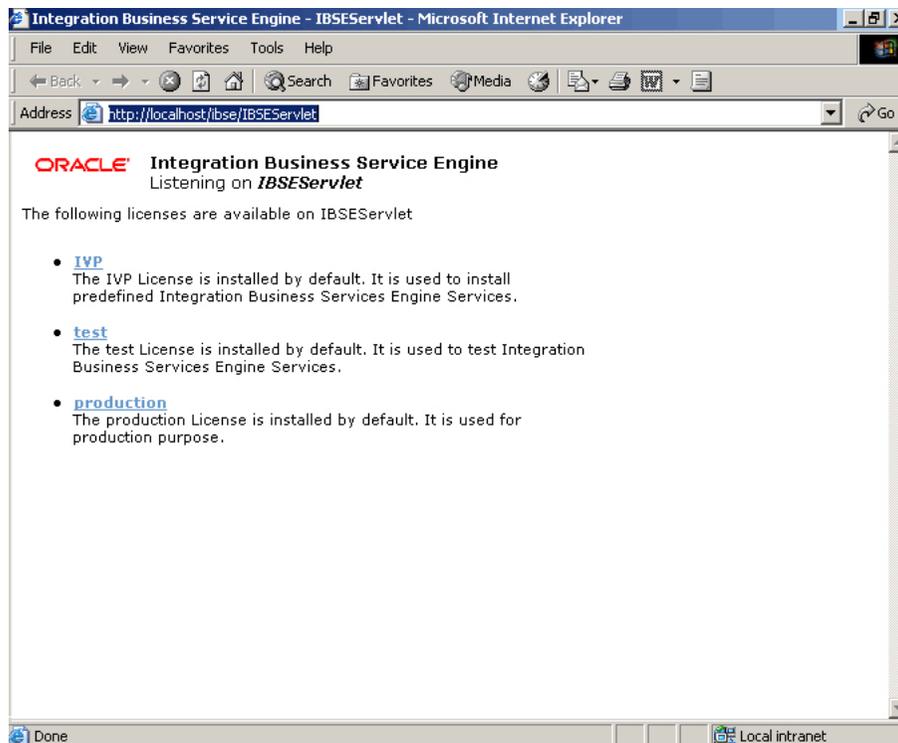
`http://hostname:port/ibse/IBSEServlet/`

`hostname` は Oracle Application Server のホスト名、`port` は Oracle Application Server の HTTP ポートをそれぞれ示します。次に例を示します。

`http://localhost:80/ibse/IBSEServlet`

図 2-14 に示すように、OracleAS Adapter ビジネス・サービス・エンジンのホーム・ページが開きます。このページを使用すると、OracleAS Adapter ビジネス・サービス・エンジンとともにインストールしたサンプル Web サーバーをテストできます。

図 2-14 OracleAS Adapter ビジネス・サービス・エンジンのホーム・ページ



2. 「IVP」、「iwayivp」、「ivp」、「Invoke」の順にクリックします。

次のような XML レスポンスがブラウザに表示されます。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
- <SOAP-ENV:Envelope xmlns:xsd="http://www.w3.org/2001/XMLSchema"
  xmlns:SOAPENV="
http://schemas.xmlsoap.org/soap/envelope/"
  xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance">
- <SOAP-ENV:Body>
- <ivpResponse xmlns="urn:oraclesoftware:ibse:jul2003:ivp:response"
  cid="A0328ED84ABFA055C4F64B8039C991AA">
<CurrentTime>2004-01-05T19:15:48Z</CurrentTime>
<Version>IWAY5.5</Version>
</ivpResponse>
</SOAP-ENV:Body>
</SOAP-ENV:Envelope>
```

J2CA デプロイメントの構成

OracleAS Adapter JCA では、ファイルとデータベースのリポジトリがサポートされます。デフォルト・リポジトリはファイル・リポジトリです。adapters/application/etc ディレクトリにある iwse.ora SQL スクリプトを実行すると、データベース・リポジトリを作成できます。

「デザインタイムおよびランタイム」インストール・タイプを選択すると、Oracle Universal Installer で OracleAS Adapter JCA バージョン 1.0 が自動的にデプロイされ、デフォルトの oc4j-ra.xml 構成ファイルが提供されます。このファイルには、JNDI 名として eis/OracleJCAAdapter/DefaultConnection を指定した、デフォルトの ManagedConnectionFactory が格納されています。

```
<connector-factory location="eis/OracleJCAAdapter/DefaultConnection"
connector-name="IWAFJCA10">
  <config-property name="IWayHome" value="../../../adapters/application"/>
  <config-property name="IWayConfig" value="jca_sample"/>
  <config-property name="IWayRepoURL" value=""/>
  <config-property name="IWayRepoUser" value=""/>
  <config-property name="IWayRepoPassword" value=""/>
  <config-property name="logLevel" value="debug"/>
</connector-factory>
```

注意： IWayRepoURL、IWayRepoUser、IWayRepoPassword の各パラメータは、データベース・リポジトリに対してのみ、使用します。

oc4j-ra.xml 構成ファイルを編集すると、別の ManagedConnectionFactory を作成できます。この作業は次のように行います。

1. `ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_BPEL/application-deployments/default/jca-app-adapter/oc4j-ra.xml` ファイルを開きます。
2. 対応する OracleAS Adapter JCA バージョン 1.0 リポジトリ・プロジェクトを指すように、`iWayConfig` パラメータを変更します。
3. JNDI の場所を正しい値に設定します。次に例を示します。

```
<connector-factory location="eis/OracleJCAAdapter/MyConnection"
connector-name="IWAFJCA10">
  <config-property name="IWayHome" value="../../../adapters/application"/>
  <config-property name="IWayConfig" value="My_jca_config"/>
  <config-property name="IWayRepoURL" value=""/>
  <config-property name="IWayRepoUser" value=""/>
  <config-property name="IWayRepoPassword" value=""/>
  <config-property name="logLevel" value="debug"/>
</connector-factory>
```

J2CA インストールの検査

J2CA バージョン 1.0 のインストールの検査は、次のように行います。

1. `ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_BPEL/applications/jca-app-adapter-test/iwafjca/WEB-INF/web.xml` ファイルを開きます。
2. 2-17 ページの「[J2CA デプロイメントの構成](#)」の手順 2 で定義した `ManagedConnectionFactory` の JNDI の場所を指すように、デプロイメント・ディレクトリ `web.xml` ファイルを変更します。

次の URL を使用して、OracleAS Adapter JCA のテスト・サーブレットにアクセスできません。

`http://hostname:port/iwafjca`

`hostname` は Oracle Application Server のホスト名、`port` は Oracle Application Server の HTTP ポートをそれぞれ示します。

ディレクトリ構造

パッケージングされたアプリケーション・アダプタは、Oracle ホーム・ディレクトリの `adapters/application` サブディレクトリにインストールされます。表 2-1 は、そのディレクトリ構造を示します。license.xml ファイルも `application` ディレクトリにインストールされます。

表 2-1 パッケージングされたアプリケーション・アダプタのディレクトリ構造

サブディレクトリ	説明
bin	install.xml ファイルが格納されます。
config	jca_sample サブディレクトリおよび OracleAS Adapter J2CA の XML ベースのリポジトリが格納されます。
etc	ibse.ear、iwafjca.ear、iwafjca.rar および iwse.ora の各ファイルが格納されます。
lib	ライブラリ・ファイルが格納されます。
tools	OracleAS Adapter アプリケーション・エクスプローラの Graphical User Interface (GUI) が格納されます。
wsdl	ユーザーが生成した WSDL ファイルが格納されます。

`directory\legacy` フォルダには、レガシー・アダプタの .rar ファイルが格納されます。さらに、`adapters\lib` フォルダには `orabpel-adapters.jar` ファイルが格納されます。

注意： ユーザーは WSDL ディレクトリの下に追加ディレクトリを作成し、生成した WSDL ファイルを整理できます。

アプリケーション・エクスプローラの起動

OracleAS Adapter J2CA バージョン 1.0 および OracleAS Adapter ビジネス・サービス・エンジンのリポジトリ・プロジェクトを構成するには、アプリケーション・エクスプローラを使用します。アプリケーション・エクスプローラを Windows で起動するには、「スタート」メニューから、「プログラム」→「OracleAS_home Adapters」→「Application Explorer」の順に選択します。

さらに、Windows では、OracleAS_home¥adapters¥application¥tools の下に iaexplorer.bat が格納されています。

OracleAS_home は、Oracle Application Server がインストールされているディレクトリです。

UNIX では、OracleAS_home/adapters/application/tools の下にある iwae.sh スクリプトをロードします。

OracleAS_home は、Oracle Application Server がインストールされているディレクトリです。

J2CA のデータベース・リポジトリの構成

1. データベースがインストールされているマシン上で、SQL 文 iwse.ora を実行します。
2. jcatransport.properties ファイルを作成し、次のディレクトリに保存します。

```
Oracle_Home¥adapters¥application¥config¥jca_sample
```

3. 次の例に示すように、新規作成した jcatransport.properties ファイルの iwafjca.repo.url、iwafjca.repo.user および iwafjca.repo.password フィールドに値を入力します。

```
iwafjca.repo.url=jdbc:oracle:thin:@90.0.0.51:1521:orcl
```

```
iwafjca.repo.user=scott
```

```
iwafjca.repo.password=scott1
```

4. oc4j-ra.xml ファイルをテキスト・エディタで開きます。
5. IWAYRepo_URL プロパティの値として JDBC 接続情報を入力します。
6. IWAYRepo_User プロパティに有効なユーザー名を入力します。
7. IWAYRepo_Password プロパティに有効なパスワードを入力します。
8. oc4j-ra.xml ファイルの変更を保存します。
9. アプリケーション・エクスプローラで、JDBC ドライバ・パスを変更します。例 1 に示されているパスを、例 2 に示されているパスに変更します。

例 1:

```
lcp=..¥lib¥orabpel-adapters.jar;C:¥jdev¥jdbc¥lib¥classes12.jar;C:¥jdev¥jdbc¥lib¥nls_charset12.jar;%lcp%
```

例 2:

```
lcp=..¥lib¥orabpel-adapters.jar;..¥..¥jdbc¥lib¥ojdbc14.jar;..¥..¥jdbc¥lib¥nls_charset12.jar;%lcp%
```

server.xml の変更

`$ORACLE_HOME/j2ee/(container)/config/server.xml` を変更する必要があります。`container` は、インストールにより、`home` または `oc4j_soa` のいずれかです。一般に、SOA の基本インストールでは `home` コンテナを使用し、SOA の拡張インストールでは `oc4j_soa` コンテナを使用します。

`server.xml` を変更する手順は、次のとおりです。

1. `server.xml` に、`jca.app.adapter.libraries` のエントリを作成します。必要な JAR ファイルは、この新しいライブラリ・セクションに追加します。一般に、これらの JAR ファイルは、それぞれの EIS ベンダーが配布する EIS ライブラリ・ファイルです。

`jca.app.adapter.libraries` 用の `server.xml` のエントリのサンプルを次に示します。

```
<shared-library name="jca.app.adapter.libraries" version="1.0"
library-compatible="true">
<code-source path="C:\%soadpl%\adapters\application\lib\psjoa.jar"/>
<code-source path="C:\%soadpl%\adapters\application\lib\psGenCompF840Mi14.jar"/>
<code-source path="C:\%soadpl%\adapters\application\lib\sapjco.jar"/>
</shared-library>
```

注意： 前述の例で、パスの Oracle ホームを置換します。前述の例で JAR ファイルのみ追加します。さらに、*.so または *.dll ファイルも PATH に指定する必要があります。

2. 次の例に示すように、`server.xml` の共有ライブラリの `oracle.bpel.common` セクションに、`jca.app.adapter.library` をインポートする必要があります。

```
<import-shared-library name="jca.app.adapter.libraries"/>
```

oc4j-ra.xml の変更

`oc4j-ra.xml` を変更する手順は、次のとおりです。

1. `oc4j-ra.xml` の `imported-shared-libraries` セクションに、次のコードを追加します。

```
<import-shared-library name="jca.app.adapter.libraries"/>
```

2. 次の例に示すように、2つの `oc4j-ra.xml` ファイルに変更を加えます。

1. **例 1:**

```
<<j2ee-home>>%application-deployments%default%jca-app-adapter%
oc4jra.xml
```

2. **例 2:**

```
<<j2ee-home>>%connectors%jca-app-adapter%jca-app-adapter%META-INF%
oc4j-ra.xml
```

注意： JCA-App-Adapter を再デプロイすると、前述の例の変更点は削除されます。

mySAP ERP アダプタ用の HP Itanium 64 マシンの構成

HP Itanium 64 ビット・マシンを mySAP ERP アダプタで動作するように構成するには、次の手順を実行します。SAPJCO ライブラリでは、Oracle Application Server で提供される Java ではなく、HP Itanium 64 ビット・マシンで提供される Java ライブラリと実行可能ファイルを使用する必要があります。

1. プロファイル内のライブラリが 64 ビットのバージョンを指すようにし、Java オプションを 64 ビットに設定します。次に、Java クラス・ローダーにバイナリに対する読取りおよび実行権限があることを確認します。次は、.profile ファイルの設定例です。この例で使用しているフォルダは単なる説明用です。

- 次は、Java オプションを 64 ビットにするサンプル・コードです。

```
_JAVA_OPTIONS=-D64
export _JAVA_OPTIONS
```

- 次は、64 ビットのライブラリ CLASSPATH=/rdms/fpgjpr を、PATH、CLASSPATH および SHLIB_PATH 変数に含めるためのサンプル・コードです。

```
export CLASSPATH
SHLIB_PATH=$SHLIB_PATH:/rdms/fpgjpr
export SHLIB_PATH
PATH=$PATH:/rdms/fpgjpr:/opt/java1.5/jre/bin/IA64W:/opt/java1.5/jre/lib:/opt/j
ava1.5/lib
export PATH
```

注意： .profile ファイルの設定を変更するには、次の手順を実行します。

1. プロファイルのバックアップを作成します。
 2. .profile ファイルに対して必要な変更を加えます。
 3. 終了して UNIX ログインを開始します。
-

2. 3つのファイル、sapjco.jar、libsapjcorfc.so および librfccm.so に対して読取り権限および実行権限を設定します。
3. Oracle Application Server が、HP Itanium で提供された Java ファイルを指すようにします。Oracle Application Server で提供された Java を指さないようにします。このためには、oc4j_soa プロセス・タイプ内のデータ ID (<data id="java-bin" value="/opt/java1.5/jre/bin/IA64W/java"/>) を変更する必要があります。次の例に示すように、新しい Java ホームを設定する必要があります。

```
<process-type id="oc4j_soa" module-id="OC4J" status="enabled">
  <module-data>
    <category id="start-parameters">
      <data id="java-options" value="-server
-XX:MaxPermSize=192M -ms512M -mx1024M -XX:AppendRatio=3
-Djava.security.policy=$ORACLE_HOME/j2ee/oc4j_soa/config/java2.policy
-Djava.awt.headless=true -Dhttp.webdir.enable=false
-Doraesb.home=/rdms/ora102/product/10.1.3.1/OracleAS_1/integration/esb
-Dhttp.proxySet=false -Doc4j.userThreads=true -Doracle.mdb.fastUndeploy=60
-Dorabpel.home=/rdms/ora102/product/10.1.3.1/OracleAS_1/bpel
-Xbootclasspath^/p:/rdms/ora102/product/10.1.3.1/OracleAS
_1/bpel/lib/orabpel-boot.jar -Dhttp.proxySet=false -Dfile.encoding=ISO8859_1
-DAF_DEBUG_REC_CONV=true"/>
      <data id="java-bin" value="/opt/java1.5/jre/bin/IA64W/java"/>
    </category>
    <category id="stop-parameters">
      <data id="java-options" value="-Djava.security.policy=$ORACLE_
HOME/j2ee/oc4j_soa/config/java2.policy -Djava.awt.headless=true
-Dhttp.webdir.enable=false"/>
    </category>
  </module-data>
```

```
<start timeout="600" retry="2"/>
<stop timeout="120"/>
<restart timeout="720" retry="2"/>
<port id="default-web-site" range="12501-12600" protocol="ajp"/>
<port id="rmi" range="12401-12500"/>
<port id="rmis" range="12701-12800"/>
<port id="jms" range="12601-12700"/>
<process-set id="default_group" numprocs="1"/>
</process-type>
```

注意： opmn.xml ファイルに変更を加える手順は、次のとおりです。

1. Oracle Application Server を停止します。
 2. opmn.xml ファイルのバックアップを作成します。
 3. opmn.xml ファイルに対して必要な変更を加えます。
 4. Oracle Application Server を再起動します。
-

レガシー・アダプタのインストール後の作業

この項では、レガシー・アダプタに対する次のインストール後の作業について説明します。

- [OPatch 7408494 のインストール](#)
- [ランタイム接続の構成](#)
- [デザインタイム接続の構成](#)

OPatch 7408494 のインストール

この項では、レガシー・アダプタに対する OPatch 7408494 のインストール方法について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [OPatch 7408494 のインストール前の作業](#)
- [OPatch 7408494 のインストール作業](#)
- [OPatch 7408494 のインストール後の作業](#)
- [OPatch 7408494 の削除作業](#)

OPatch 7408494 のインストール前の作業

OPatch 7408494 のインストール前の作業は、次のとおりです。

1. Adapter 10.1.3.1 をインストールしてあることを確認します。
2. SOA インストールが 10.1.3.4 にアップグレード済であることを確認します。
3. スタンドアロン・インストールの場合は orabpel を停止します。それ以外の場合で中間層インストールの場合は、ORACLE_HOME から実行しているすべてのプロセスを、ASControl も含めて、次のコマンドを実行して停止します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/opmnctl stopall
```

4. SOA パッチ 6325749 をインストールします。これは、Oracle BPEL Process Manager の Glue クラスにアップグレードするために、metalink.oracle.com で入手可能です。
5. \$NAV_ROOT/bin/brand.bin から、既存の brand.bin ファイル（ある場合）のバックアップをとりまします。このファイルは、OPatch のインストール時に上書きされます。NAV_ROOT は、Oracle Connect がインストールされているディレクトリです。

OPatch 7408494 のインストール作業

OPatch 7408494 をインストールする手順は、次のとおりです。

1. 次のコマンドを使用して、PSE コンテナ・ファイルを解凍します。

```
% unzip p7408494_101340_GENERIC.zip
```

2. 次のコマンドを使用して、現行ディレクトリをパッチのあるディレクトリに設定します。

```
% cd 7408494
```

3. OPatch スクリプトを含むディレクトリが \$PATH に表示されていることを確認して、次のコマンドを実行します。

```
% opatch apply
```

OPatch 7408494 のインストール後の作業

OPatch 7408494 のインストール後の作業は、次のとおりです。

1. スタンドアロン・インストールの場合は、`orabpel` を再起動します。それ以外の場合で中間層インストールの場合は、次のコマンドを使用してすべての管理対象コンポーネントを再起動します。

```
$(ORACLE_HOME)/bin/opmn/opmnctl startall
```

2. このパッチには新しい `attunityResourceAdapter.rar` ファイルが含まれているため、レガシー・アダプタを再デプロイします。

3. Oracle Studio および Oracle Connector など、必要なアダプタ・コンポーネントをインストールします。『Oracle Application Server CDC Adapters for IMS/DB ユーザーズ・ガイド』の Oracle Connect および Oracle Studio のインストールに関する項を参照してください。

注意： Oracle インベントリが正しく設定されていない場合、このユーティリティは失敗します。インベントリにアクセスできるかどうかを確認するには、次のコマンドを使用します。

```
% opatch lsinventory
```

OPatch 7408494 の削除作業

次のコマンドを使用して OPatch 7408494 を削除します。

```
% cd 7408494
```

```
% opatch rollback -id 7408494
```

ランタイム接続の構成

次の手順を実行してランタイム接続を構成します。

1. 次の場所にある oc4j-ra.xml ファイルを編集します。

```
ORACLE_HOME%j2ee%OC4J_
BPEL%application-deployments%default%jca-legacy-adapter
```

2. 接続ごとに次のように設定します。

```
<oc4j-connector-factories>
  <connector-factory location=" " connector-name="Oracle Legacy Adapter">
    <config-property name="userName" value=" "/>
    <config-property name="password" value=" "/>
    <config-property name="eisName" value=" "/>
    <config-property name="serverName" value=" "/>
    <config-property name="workspace" value=" "/>
    <config-property name="portNumber" value=" "/>
    <config-property name="persistentConnection" value=" "/>
    <config-property name="keepAlive" value=" "/>
    <config-property name="firewallProtocol" value=""/>
    <config-property name="connectTimeout" value=""/>
    <config-property name="encryptionProtocol" value=""/>
    <config-property name="encryptionKeyName" value=""/>
    <config-property name="encryptionKeyValue" value=""/>
    <config-property name="fakeXa" value="false"/>
    <config-property name="useNamespace" value="true"/>
  </connector-factory>
</oc4j-connector-factories>
```

次の表に、指定する必要があるプロパティを示します。

プロパティ	説明
location	<p>Oracle Application Server がアプリケーション・コンポーネントのコネクション・ファクトリ・インスタンスをバインドする必要がある JNDI の場所を指定します。この場所は eis/legacy/eisName と指定する必要があります。</p> <p>この規則は、デザインタイムの WSIL ブラウザで、JNDI の場所が含まれるレガシー・アダプタ・サービス WSDL を生成するときに使用します (特に、jca:address 要素の adapterInstanceJndi 属性)。これはランタイムが接続の取得に使用する JNDI の場所と同じです。たとえば、eisName が DEMOEvent である場合、この場所は eis/legacy/DEMOEvent と指定する必要があります。</p> <p>この例では、所定の eisName が DEMOEvent であるため、デザインタイムの WSIL は WSDL に adapterInstanceJndi=eis/legacy/DEMOEvent を設定し、ランタイムが JNDI の場所 eis/legacy/DEMOEvent を自動的に使用してランタイム接続を取得します。したがって、場所の属性にはこの同じ値を設定する必要があります。設定しない場合はランタイムの解決に失敗し、エラーが発生します。</p>
eisName	使用するアダプタの名前を設定します。
serverName	Oracle Connect デーモンが動作する TCP/IP アドレスまたはホスト名を設定します。
workspace	使用する Oracle Connect サーバー作業領域の名前を指定します。デフォルトの作業領域はナビゲータです。
portNumber	Oracle Connect デーモンが動作するサーバー上の TCP/IP ポートを指定します。デフォルト・ポートは 2552 です。

プロパティ	説明
fakeXa	値は true または false に設定できます。 true に設定した場合、XA API は内部的にローカル・トランザクション API に変換されます。
useNamespace	値は true または false に設定できます。 true に設定した場合、XSD メタデータに名前空間が指定され、この名前空間を使用してペイロード・ノードが作成されます。 注意: このプロパティは true に設定することをお勧めします。

次の表に、オプション・プロパティを示します。

プロパティ	説明
userName	Oracle Connect サーバーにアクセスできるユーザーを指定します。このユーザーは Oracle Connect デーモン構成で定義されます。
password	ユーザーの有効なパスワードを指定します。
persistentConnection	true または false に設定します。 true に設定した場合、複数のリクエストで接続を維持でき、 false の場合は接続コンテキストが変更されます。このプロパティは true に設定することをお勧めします。
keepAlive	true または false に設定します。 true に設定した場合、接続に使用されるソケットが常に開かれた状態となります。このプロパティは true に設定することをお勧めします。
firewallProtocol	使用するファイアウォール・プロトコルとして、 none または fixedNat (デーモンに固定アドレスを使用する NAT プロトコル) のいずれかを指定します。デフォルトは none です。
connectTimeout	接続のタイムアウトを秒数で指定します。デフォルトは 0 (ゼロ) です。これは、接続がタイムアウトにならないことを意味します。
encryptionProtocol	使用する暗号化プロトコルの名前を指定します。デフォルトは null です。RC4 プロトコルがサポートされています。
encryptionKeyName	使用する対称暗号化鍵の名前を指定します。
encryptionKeyValue	使用する対称暗号化鍵の値を指定します。

デザインタイム接続の構成

Oracle JDeveloper で WSIL ブラウザを使用して従来の対話を参照する必要がある場合、collaxa-config.xml ファイルを更新します。これにより、BPEL Process Manager がレガシー・サーバーと通信できるようになります。collaxa-config.xml ファイルは次の場所にあります。

```
$Oracle_Home/integration/orabpel/system/config
```

次の手順を実行してデザインタイム接続を構成します。

1. 「スタート」メニューから、「プログラム」 → 「Oracle BPEL PM」 → 「Developer Prompt」の順に選択します。
2. `encrypt <passwd>` と入力します。
3. collaxa-config.xml ファイルで、次の表に示したパラメータを更新します。

パラメータ	説明
LegacyServer	Attunity Connect が動作するレガシー・サーバーを指定します。
LegacyPort	Attunity Connect がリスニングするポートを指定します。
LegacyUser	メインフレーム・システムにアクセスできるユーザー ID を指定します。
LegacyUserCredential	ユーザーの暗号化されたパスワードを指定します。

例 2-1 collaxa-config.xml ファイルの更新

次の例では、collaxa-config.xml ファイルが必要なパラメータにより更新されます。

```
<property id="LegacyServer">
  <name>Legacy server(s) where Oracle Connect is installed</name>
  <value>mvs08</value>
  <comment>
    <![CDATA[Server IP where Oracle Connect has been installed.
    <p/>
    The default fault is value <i>localhost</i>.]>
  </comment>
</property>

<property id="LegacyPort">
  <name>Legacy server port(s) where Oracle Connect is running</name>
  <value>2554</value>
  <comment>
    <![CDATA[Server port where Oracle Connect has been installed.
    <p/>
    The default is <i>2551</i>.]>
  </comment>
</property>

<property id="LegacyUser">
  <name>Legacy server user(s) where Oracle Connect is running</name>
  <value>null</value>
  <comment>
    <![CDATA[Server user who has access to Oracle Connect.
    <p/>
    The default is <i>Null</i>.]>
  </comment>
</property>

<property id="LegacyUserCredential">
  <name>Legacy server user credential(s) where Oracle Connect is
  running</name>
```

```

<value>null</value>
<comment>
<![CDATA[Credential for server user that has access to Oracle Connect.
<p/>
The default is <i>Null</i>.]>
</comment>
</property>

```

注意： Oracle Studio に匿名のアクセス設定がある場合、LegacyUser プロパティおよび LegacyUserCredential プロパティの両方に null を指定する必要があります。

例 2-2 複数接続の指定

レガシー・システムのインスタンスを追加するには、次の例に示すように、コンピュータごとにカンマ区切りの値を指定します。

```

<property id="LegacyServer">
  <name>Legacy server(s) where Oracle Connect is installed</name>
  <value>mvs08,mvs09</value>
  <comment>
  <![CDATA[Server IP where Oracle Connect has been installed.
  <p/>
  The default is <i>localhost</i>.]>
  </comment>
</property>

<property id="LegacyPort">
  <name>Legacy server port(s) where Oracle Connect is running</name>
  <value>2554,2555</value>
  <comment>
  <![CDATA[Server port where Oracle Connect has been installed.
  <p/>
  The default is <i>2551</i>.]>
  </comment>
</property>

<property id="LegacyUser">
  <name>Legacy server user(s) where Oracle Connect is running</name>
  <value>null,xyz</value>
  <comment>
  <![CDATA[Server user who has access to Oracle Connect.
  <p/>
  The default is <i>Null</i>.]>
  </comment>
</property>

<property id="LegacyUserCredential">
  <name>Legacy server user credential(s) where Oracle Connect is running</name>
  <value>null,AVCGS80JK9J08M9MLYJM90U</value>
  <comment>
  <![CDATA[Credential for server user that has access to Oracle Connect.
  <p/>
  The default is <i>Null</i>.]>
  </comment>
</property>

```

削除作業

Oracle Application Server アダプタを削除するには、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドを実行して、以前の 10.1.3.1 Adapter インストールをクリーン・アップします。

UNIX の場合：

```
cd $ORACLE_HOME/j2ee/home

$ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar admin_client.jar
deployer:oc4j:opmn://localhost:6003/home oc4jadmin welcome1 -undeploy
jca-legacy-adapter -isConnector

$ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar admin_client.jar
deployer:oc4j:opmn://localhost:6003/home oc4jadmin welcome1 -undeploy
jca-app-adapter -isConnector

$ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar admin_client.jar
deployer:oc4j:opmn://localhost:6003/home oc4jadmin welcome1 -undeploy
jca-app-adapter-test

$ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar admin_client.jar
deployer:oc4j:opmn://localhost:6003/home oc4jadmin welcome1 -undeploy
ws-app-adapter
```

Windows の場合：

```
cd %ORACLE_HOME%/j2ee/home

%ORACLE_HOME%/jdk/bin/java -jar admin_client.jar
deployer:oc4j:opmn://localhost:6003/home oc4jadmin welcome1 -undeploy
jca-legacy-adapter -isConnector

%ORACLE_HOME%/jdk/bin/java -jar admin_client.jar
deployer:oc4j:opmn://localhost:6003/home oc4jadmin welcome1 -undeploy
jca-app-adapter -isConnector

%ORACLE_HOME%/jdk/bin/java -jar admin_client.jar
deployer:oc4j:opmn://localhost:6003/home oc4jadmin welcome1 -undeploy
jca-app-adapter-test

%ORACLE_HOME%/jdk/bin/java -jar admin_client.jar
deployer:oc4j:opmn://localhost:6003/home oc4jadmin welcome1 -undeploy
ws-app-adapter
```

注意： ORACLE_HOME 環境変数が、ご使用の SOA インストールの場所に設定されていることを確認してください。

前述の例で指定されている各コマンドで、ホスト名および OPMN リクエスト・ポート番号が正しく指定されていることを確認してください。この例では、それぞれ、localhost および 6004 が使用されています。

特定のアプリケーション / リソース・アダプタが存在しないというエラー・メッセージは無視してください。

2. 使用中のホストにインストールされている Oracle Universal Installer を起動します。
3. 「製品の削除」をクリックします。
4. 削除する製品が格納されている Oracle ホーム・ディレクトリを開きます。
5. 削除する特定の OracleAS Adapter を選択します。

6. 「削除」をクリックします。
7. 応答を求めるメッセージが表示されたら、「はい」をクリックします。選択した製品が削除されます。
8. 「閉じる」をクリックします。

注意： レガシー J2CA リソース・アダプタをアンデプロイする必要があるのは、レガシー・アダプタのセット全体のアンデプロイを選択した場合のみです。

グローバルゼーション・サポート

パッケージングされたアプリケーションおよびレガシー・アプリケーション用の Oracle Application Server アダプタでは、様々なエンコードをサポートしており、実行時に非 ASCII データを受入れ可能です。また、アプリケーション・エクスプローラではローカライゼーションをサポートしていますが、Oracle Studio ではサポートしていません。

注意： アプリケーション・エクスプローラでは ADA 準拠をサポートしていますが、Oracle Studio ではサポートしていません。

OracleAS Adapter for PeopleSoft の構成

この付録では、OracleAS Adapter for PeopleSoft の構成方法を説明します。次のことをする必要があります。

- 使用している PeopleSoft のバージョンを指定します。
- アダプタのコンポーネント・インタフェースをインストールします。
- TCP/IP メッセージ・ルーター・アダプタをインストールします。
- `psjoa.jar` ファイル (PeopleSoft release 8.1 の場合は、および `pstools.properties` ファイル) を `OracleAS_home¥adapters¥application¥lib` ディレクトリにコピーします。

この付録の内容は次のとおりです。

- [PeopleSoft のバージョンの指定](#)
- [アダプタ・コンポーネント・インタフェースのインストール](#)

PeopleSoft のバージョンの指定

OracleAS Adapter for PeopleSoft では、複数のバージョンの PeopleSoft がサポートされています。ただし、互いに非互換のバージョンもあるので、使用中のバージョンをアダプタで認識する必要があります。

インストール後、両方のバージョンの PeopleSoft がデフォルトの場所 (`OracleAS_home¥adapters¥application¥lib`) に表示されます。

Windows 以外のシステムでは、対応する場所を使用します。

アダプタを確実に正しく動作させるため、使用中のリリースに対応していないファイルは削除します。

- PeopleSoft 8.4x リリースの場合は、`iwpsci81.jar` を削除します。
- PeopleSoft 8.1x リリースの場合は、`iwpsci84.jar` を削除します。

`lib` ディレクトリの内容の変更後、すべてのコンポーネントを再起動します。

アダプタ・コンポーネント・インタフェースのインストール

OracleAS Adapter for PeopleSoft には、2つのカスタム・コンポーネント・インタフェースが含まれています。アプリケーション・エクスプローラでは、これらのコンポーネント・インタフェースを使用して、イベントとサービス用のスキーマを作成します。

OracleAS Adapter for PeopleSoft 用のコンポーネント・インタフェースを構成するには、次のことを行う必要があります。

1. コンポーネント・インタフェースをインポートしてビルドします。
2. コンポーネント・インタフェースのセキュリティを構成します。
3. コンポーネント・インタフェースをテストします。

コンポーネント・インタフェースのインポートおよびビルド

OracleAS Adapter for PeopleSoft とともに提供されるコンポーネント・インタフェースは、次のような PeopleSoft プロジェクトを介して配布されます。

- PeopleSoft リリース 8.4 の場合は、`iwpsci84.zip` にパッケージングされた `IWY_CI_84` プロジェクト。
- PeopleSoft リリース 8.1 の場合は、`iwpsci81.zip` にパッケージングされた `IWY_CI_81` プロジェクト。

Microsoft Windows の場合、デフォルトでは、`OracleAS_home¥adapters¥application¥etc¥peoplesoft` にこのファイルがあります。

Windows 以外のシステムでは、対応する場所を使用します。

コンポーネント・インタフェースのインポートおよびビルド

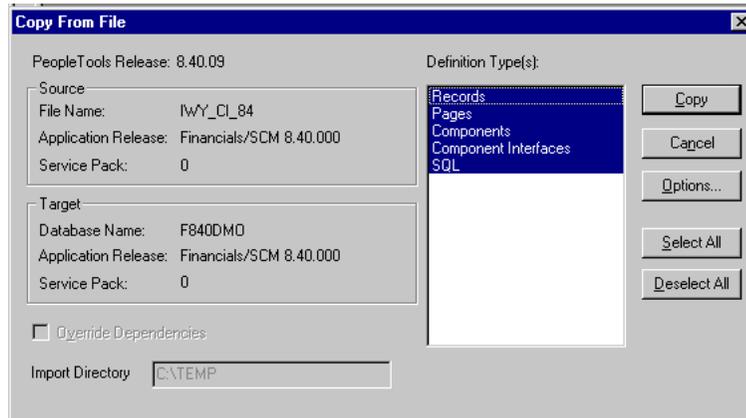
`IWY_CI_81` または `IWY_CI_84` プロジェクトを PeopleSoft にインポートするには、次のようにします。

1. `iwpsci81.zip` または `iwpsci84.zip` を任意のディレクトリに解凍します。

解凍処理中にサブディレクトリが作成されます。たとえば、ファイルを `c:¥temp` に抽出すると、`c:¥temp¥IWY_CI_81` または `c:¥temp¥IWY_CI_84` ディレクトリが作成されます。

2. PeopleSoft アプリケーション・デザイナを 2 層モードで起動します。

3. 「Copy From File」プロジェクト選択ダイアログ・ボックスを次のように開きます。
 - PeopleSoft 8.4 の場合、「Tools」メニューから「Copy Project」を選択して、次に「From File」を選択します。
 - PeopleSoft 8.1 の場合、「File」メニューから「Copy Project from File」を選択します。「Copy Project from File」ダイアログ・ボックスが開きます。
4. ファイルを解凍した元のディレクトリに移動します。



5. 「Open」(リリース 8.4 の場合) または 「Copy」(リリース 8.1 の場合) をクリックして、「Copy From File」ダイアログ・ボックスを開きます。

注意: 前の図は PeopleSoft リリース 8.4 を示しますが、指示はリリース 8.1 と 8.4 の両方に対応しています。

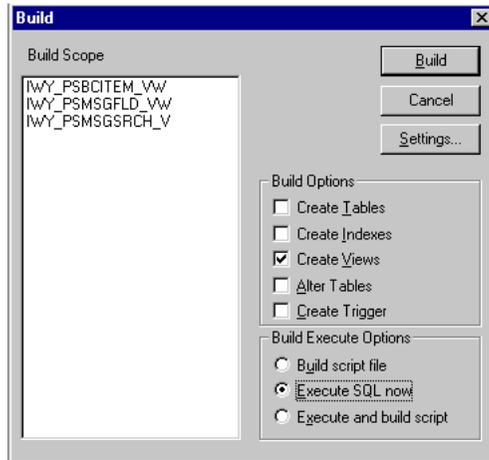
6. 「Definition Type(s)」に表示されるすべてのオブジェクトを強調表示して、「Copy」をクリックします。

正しく完了したことを示す次のメッセージがアプリケーション・デザイナーに表示されます。

```
Components Application Upgrade Copy ended: 2002-10-21-13.01.38 (62.21)
Component Interfaces Application Upgrade Copy started: 2002-10-21-13.01.38 (62.6)
Component Interfaces Application Upgrade Copy ended: 2002-10-21-13.01.39 (62.21)
SQL Application Upgrade Copy started: 2002-10-21-13.01.39 (62.6)
SQL Application Upgrade Copy ended: 2002-10-21-13.01.40 (62.21)
```

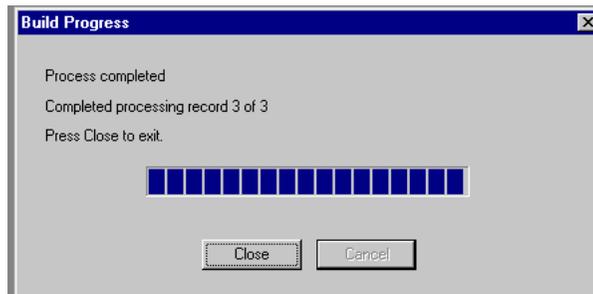


- プロジェクトにビューをビルドするには、「**Build**」、「**Project**」の順に選択します。
「**Build**」ダイアログ・ボックスが表示されます。



- 「**Build Options**」ペインで、「**Create Views**」を選択します。
- 「**Build Execute Options**」ペインで、使用中のサイトで通常使用するオプションを選択します。(前の図では、「**Execute SQL now**」が選択されています。)
- 「**Build**」をクリックします。

「**Build Progress**」状態ウィンドウがアプリケーション・デザイナに表示されます。



ネイティブのSQLツールを使用して、生成されたビューからレコードを表示すると、レコードが正しく作成されたことを確認できます。

- ビューが正しく生成されなかった場合は、「**Close**」をクリックして、SQLビルドのログ文をダブルクリックします。

PSBUILD ログ・ファイルが表示されます。

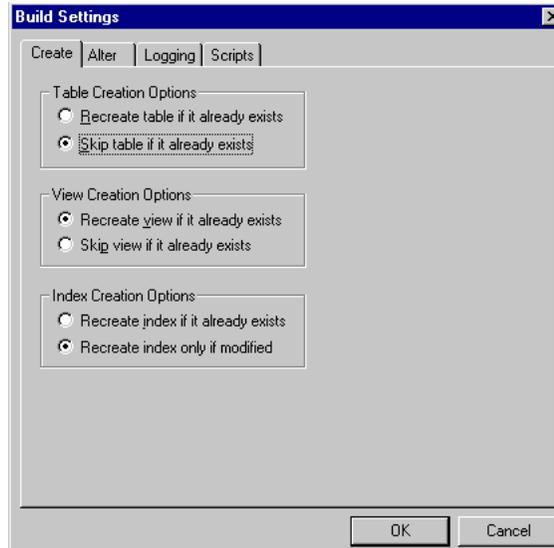
```

Psbuild.log - Notepad
File Edit Search Help
SQL Build process began on 11/5/02 at 10:29:20 AM for database F840DM0.

SQL Build process ended on 11/5/02 at 10:29:22 AM.
3 records processed, 0 errors, 0 warnings.
SQL executed online.
SQL Build log file written to C:\TEMP\PSBUILD.LOG.
    
```

12. 問題が発生する場合は、「Build」、「Settings」の順に選択して、ビルド設定オプションをチェックします。

「Build Settings」ダイアログ・ボックスが表示されます。



PeopleSoft 用のアプリケーション・サーバー・データベースに応じて、表領域名を指定する必要がある場合があります。この機能の詳細は、PeopleSoft データベースの管理者に問い合せてください。

これで、コンポーネント・インタフェースのインポートとビルドが終了します。コンポーネント・インタフェースのセキュリティの構成方法は、A-5 ページの「[コンポーネント・インタフェースのセキュリティの構成](#)」を参照してください。

コンポーネント・インタフェースのセキュリティの構成

アプリケーション・エクスプローラには、前の手順でインポートおよびビルドしたコンポーネント・インタフェースが必要です。このため、アプリケーション・エクスプローラのすべてのユーザーがこれらのコンポーネント・インタフェースにアクセスできることを確認する必要があります。すべての PeopleSoft のオブジェクトと同様に、セキュリティは権限リストレベルで割り当てられます。サイトのセキュリティ要件を検討して、どのユーザーがアプリケーション・エクスプローラを使用するかを決定し、次にそれらのユーザーの権限リストごとにコンポーネント・インタフェースのセキュリティを設定します。

注意： これらのコンポーネント・インタフェースは、スキーマとビジネス・サービスの作成に必要であり、Find メソッドを使用するため、実行時に使用されます。これらには、Get と Find のアクセス権のみがあるため、PeopleSoft のデータベースの更新には使用できません。この設定により、セキュリティ・リスクを最小限に抑えています。

PeopleSoft リリース 8.1 の場合は、2 層、3 層または 4 層モードでセキュリティを設定できます。リリース 8.4 以降の場合は、4 層モードのみでセキュリティを設定できます。

次の手順は、サポートされるすべてのモードにおいて、サポート済の PeopleSoft の全リリースに対してセキュリティを設定する方法を説明します。手順の中で示されている図は、4層モードの PeopleSoft リリース 8.4 を示します。



1. 「PeopleTools」、「セキュリティ」、「ユーザー・プロファイル」、「権限リスト/ロール」、「権限リスト」の順に選択します。
2. 「検索」をクリックして、関連する権限リストを選択します。
「権限リスト」ペインが右側に開きます。

Permission Lists

Enter any information you have and click Search. Leave fields blank for a list of all values.

Find an Existing Value [Add a New Value](#)

Search by: begins with

[Search](#) [Advanced Search](#)

Search Results

Only the first 300 results can be displayed. Enter more information above and search again to reduce the number of search results.

[View All](#) First 1-100 of 300 [Last](#)

Permission List	Description
AEAE1000	Environments Management
AEPNLS	AEPNLS: clone of ALLPNLS
ALLPAGES	ALLPAGES
ALLPORTL	All Portal
AMPNLS	(blank)
AMSYSTEM	(blank)
APPNLS	(blank)
APPSRVR	Can start application server
BDPNLSA	(blank)
BDPNLSS	(blank)
BIPNLS	Billing Panels
CPAE1000	Application Environment
CPEO1000	Enterprise Objects

3. 「サインオン時間」タブの隣の右矢印をクリックすると、「コンポーネント・インタフェース」タブが表示されます。



4. 「コンポーネント・インタフェース」タブをクリックします。
5. コンポーネント・インタフェース・リストに新しい行を追加するには、プラス記号 (+) を選択します。
6. IWY_CI_ATTRIBUTES コンポーネント・インタフェースを入力または選択し、「編集」をクリックします。
7. Get および Find メソッドをフル・アクセスに設定するには、「すべてフル・アクセス」をクリックします。
8. 「OK」をクリックします。

9. IWY_CI_MESSAGES コンポーネント・インタフェースに対して、手順 5 から 8 までを繰り返し続けます。
10. 「コンポーネント・インタフェース」ウィンドウの下部までスクロールして、「保存」をクリックします。

これで、OracleAS Adapter for PeopleSoft とともに配布されたコンポーネント・インタフェースのセキュリティの構成が終了します。これらのコンポーネント・インタフェースのテスト方法は、A-7 ページの「コンポーネント・インタフェースのテスト」を参照してください。

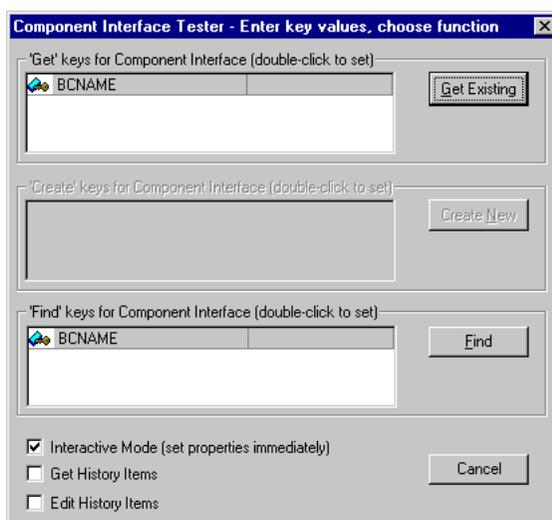
コンポーネント・インタフェースのテスト

OracleAS Adapter for PeopleSoft のコンポーネント・インタフェースは、使用する前にテストする必要があります。

コンポーネント・インタフェースのテストは、次のように行います。

1. PeopleSoft アプリケーション・デザイナーで、IWY_CI_ATTRIBUTES コンポーネント・インタフェースを開きます。
2. 「Tools」、 「Test Component Interface」の順に選択します。

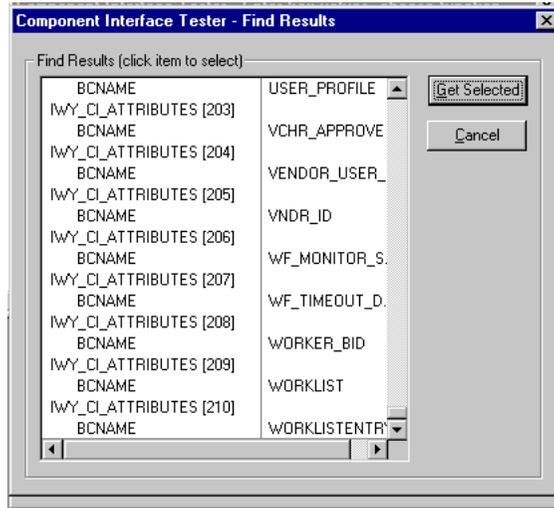
「Component Interface Tester」ダイアログ・ボックスが表示されます。



注意： このコンポーネント・インタフェースには Add メソッドが適用されないため、「Create New」オプションは無効になっています。

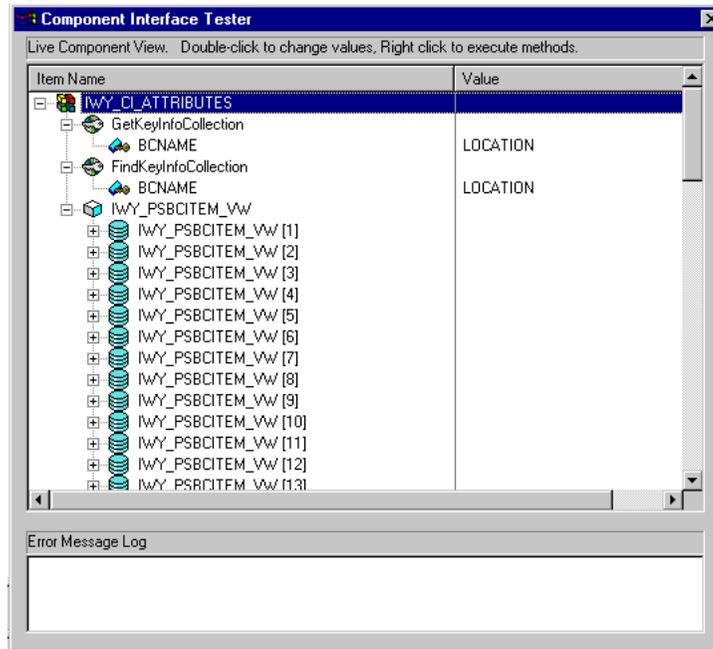
3. 「Find」をクリックします。基本となるコンポーネントのエントリが表示されます。

表示されるエントリ数が制限されていることを示すメッセージが表示されることがあります。これは問題ありません。

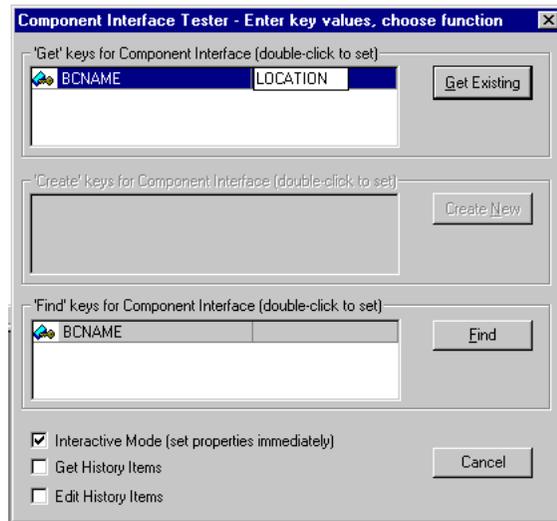


4. 「Find Results」ウィンドウから対応するキーとともに1行を選択し、「Get Selected」をクリックします。選択したキーに関連するデータが表示されます。

このウィンドウが開くと、Find メソッドに対するコンポーネント・インタフェースのテストが正しく完了したことになります。

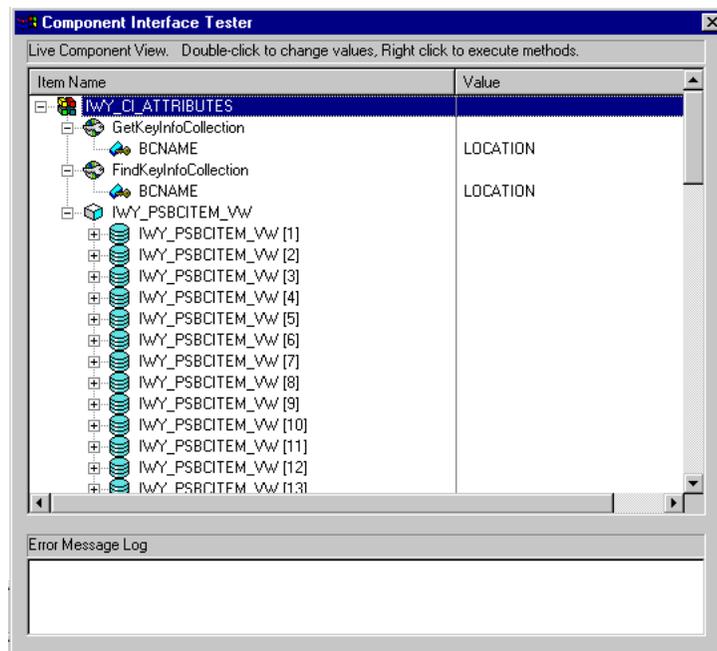


5. 「Get Existing」をクリックします。Get メソッドの場合は、既存のキーを入力する必要があります。



入力したキーの公開プロパティが返されます。

次のウィンドウが開くと、Get メソッドに対するコンポーネント・インタフェースのテストが正しく完了したことになります。



6. IWY_CI_MESSAGES コンポーネント・インタフェースに対して、このプロセスを繰り返します。

これで、コンポーネント・インタフェースのテストは終了です。

OracleAS Adapter for PeopleSoft 用の TCP/IP メッセージ・ルーターのインストール

TCP/IP を使用して PeopleSoft からコンポーネントに XML イベント文書を送信可能にするには、使用中の PeopleSoft のリリースに必要なタイプの TCP/IP メッセージ・ルーターをインストールする必要があります。

- リリース 8.4 の場合、TCP/IP ターゲット・コネクタをインストールします。詳細は、A-10 ページの「[PeopleSoft リリース 8.4 用の TCP/IP ターゲット・コネクタのインストール](#)」を参照してください。
- リリース 8.1 の場合、TCP/IP ハンドラをインストールします。詳細は、A-10 ページの「[PeopleSoft リリース 8.1 用の TCP/IP ハンドラのインストール](#)」を参照してください。

注意： イベントの処理に PeopleSoft のメッセージを使用していない場合は、このトピックをスキップできます。

PeopleSoft リリース 8.4 用の TCP/IP ターゲット・コネクタのインストール

PeopleSoft リリース 8.4 用の TCP/IP ターゲット・コネクタは、OracleAS Adapter for PeopleSoft とともにインストールされます。Microsoft Windows の場合、デフォルトでは、`OracleAS_home\adapters\application\etc\peoplesoft\iwpsevent84.jar` にインストールされます。

Windows 以外のシステムでは、対応する場所を使用します。

PeopleSoft リリース 8.4 用の TCP/IP ターゲット・コネクタのインストールは、次のように行います。

1. `iwpsevent84.jar` から `TCPIPTARGET84.class` を抽出します。使用中のプラットフォームの任意の抽出ユーティリティを使用します。
2. `TCPIPTARGET84.class` を PeopleSoft ゲートウェイ Web サーバーがあるプラットフォームに移植します。
3. PeopleSoft サーバーの `target connector` ディレクトリに `TCPIPTARGET84.class` を配置します。

PeopleSoft リリース 8.1 用の TCP/IP ハンドラのインストール

PeopleSoft リリース 8.1 用の TCP/IP ターゲット・コネクタは、OracleAS Adapter for PeopleSoft とともにインストールされます。Microsoft Windows の場合、デフォルトでは、`OracleAS_home\adapters\application\etc\peoplesoft\iwpsevent81.jar` にインストールされます。

Windows 以外のシステムでは、対応する場所を使用します。この場所がない場合は、販売代理店に問い合わせて関連するファイルを入手してください。

PeopleSoft リリース 8.1 用の TCP/IP ハンドラのインストールは、次のように行います。

1. `iwpsevent81.jar` を PeopleSoft ゲートウェイ Web サーバーがあるプラットフォームに移植します。
2. PeopleSoft Web サーバーの `servletclasses` ディレクトリに `iwpsevent81.jar` を配置します。
3. 組込みクラスのファイルを抽出します。

UNIX システムでの TCP/IP ハンドラのインストール

UNIX システムでの PeopleSoft リリース 8.1 用 TCP/IP ハンドラのインストールは、次のように行います。

1. 正しい PeopleSoft の ID と権限を使用して UNIX システムにログオンします。
2. PeopleSoft Web サブレット・ディレクトリに移動します。このディレクトリはリリースによって異なる場合がありますが、通常は次のディレクトリです。

```
$PS_HOME/webserv/servletclasses
```

3. jar コマンドを発行して、PeopleSoft に必要なクラス・ファイルを抽出します。

次にコマンドの例を示します。

```
jar -xvf /tmp/iwpsevent81.jar
```

Sun 社の Solaris システムでは、次の出力が表示されます。

```
$ jar -xvf /tmp/iwpsevent81.jar
created: META-INF/
extracted: META-INF/MANIFEST.MF
extracted: psft/pt8/tcphandler/TCPIPHandler81$Entry.class
extracted:
psft/pt8/tcphandler/TCPIPHandler81$HandlerEntry.class
extracted:
psft/pt8/tcphandler/TCPIPHandler81$PublicationHandler.class
extracted: psft/pt8/tcphandler/TCPIPHandler81.class
$
```

注意： ファイルは、psft/pt8 に新しく作成される tcphandler というディレクトリに配置されます。

PeopleSoft のファイルの Lib ディレクトリへのコピー

アプリケーション・エクスプローラでは、PeopleSoft コンポーネント・インタフェースから XSD スキーマとビジネス・サービスが、PeopleSoft メッセージから XSD スキーマがそれぞれ作成されます。この処理を行うには、`OracleAS_home¥adapters¥application¥lib` ディレクトリに次のファイルが存在する必要があります。

次のファイルが lib ディレクトリにあることを確認します。

- PeopleSoft Java Object Adapter (psjoa.jar)

このファイルにより、クライアント・アプリケーションと PeopleSoft 間にまたがるロー・レベル・インタフェースが提供されます。このファイルは、PeopleSoft から提供され、次のディレクトリにあります。

```
PS_HOME¥web¥PSJOA
```

psjoa.jar ファイルは、PeopleSoft のバージョンごとに異なります。PeopleTools のリリースをアップグレードするときは、必ず新しいリリースの psjoa.jar ファイルを `OracleAS_home¥adapters¥application¥lib` ディレクトリにコピーし、すべてのコンポーネントを再起動します。

- pstools.properties (PeopleSoft 8.1.x の場合)

PeopleSoft リリース 8.1x には、さらに pstools.properties というファイルが必要です。このファイルは次のディレクトリにあります。

```
PS_HOME¥web¥jmac
```

- psoftcrmci.jar

このファイルには、PeopleSoft コンポーネント・インタフェースから生成された一連の Java クラスが格納されています。

索引

J

- J2EE および Web Cache
 - Oracle Application Server Integration B2B と同じ Oracle ホームにインストール, 2-3
 - Oracle Application Server Integration B2B の使用に必要, 2-3
- J2EE および Web Cache の要件, 1-8

O

- Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J), 1-4
- Oracle Application Server Integration B2B
 - J2EE および Web Cache の要件, 2-3
- Oracle Application Server Portal, 1-4
- Oracle AS Adapter ビジネス・サービス・エンジン, 1-5
- OracleAS Adapter, 1-4
- OracleAS Adapter for J.D. Edwards OneWorld XE, 2-13
- OracleAS Adapter for PeopleSoft, 2-13
- OracleAS Adapter for SAP R/3, 2-14
- OracleAS Adapter for Siebel, 2-15
- OracleAS Adapter JCA バージョン 1.0 のインストールの検査, 2-18
- OracleAS Adapter JCA バージョン 1.0 のデプロイ後の構成, 2-17
- OracleAS Adapter アプリケーション・エクスプローラの構成, 2-19
- OracleAS Adapter ビジネス・サービス・エンジンのインストールの検査, 2-16

い

- インストール作業, 2-2
- インストール・ログ・ファイル場所, 2-6

お

- オペレーティング・システム要件, 1-7

さ

- 削除作業, 2-28

そ

- ソフトウェア要件, 1-7

て

- デザインタイム・コンポーネント, 1-5

は

- ハードウェア要件, 1-7
- パッケージングされたアプリケーション・アダプタのディレクトリ構造, 2-18

ら

- ライブラリ・ファイルのコピー, 2-13
- ランタイム・コンポーネント, 1-5

ろ

- ログ・ファイル場所, 2-6

